For Adult Only

妹放課後でじゅぱ

R18
ADULT ONLY

梓ちゃんがお泊りにきました。
オフロわいたよ～
スルッ
憂ってスタイルいいよね
ふぇ？
おっぱいおおきいし！
ふぇ！？
そ、そんな事ないよ 私は梓ちゃんのスレンダーな体型の方がカワイイと思うよ
ぷるぷる
ぷるぷる
ぬぎっ
…かわいいよ？
しゅん…
プチ

今おっぱいも小さくてかわいいとか思ったでしょ！

そりゃ憂のに比べたらちいさいけどね…というかこれまた成長したんじゃない？

もみ♥

いいなぁ

にゅ

ん——！

ちょっとだけ

ぎゅ〜

キャ〜♥

キュッ

ぎゅ〜

あずちゃ〜っ♥

もみ

あ♥

あ、梓ちゃん…触り方えっちだよ

もみ

ぎゅんっ

はっ♡
梓ちゃんッ…
はずかしいよぉ
はっ♡
ビクッ
ダメッ…そこっ♡
ビクッ
ムニュ
ぷにぷに?♡
レロッ
レロッ
あ!
プシュー
わ…ごめんね
憂のおっぱい触り心地よくて
…だいじょぶ?
ひどいよ~
梓ちゃんに恥ずかしい
声聞かれた~
えーん
もー
え、ちだ…
ごめん~
わたしも~
わたしだって
あずさちゃんに
仕返しする~っ
えへ~
へぅ…

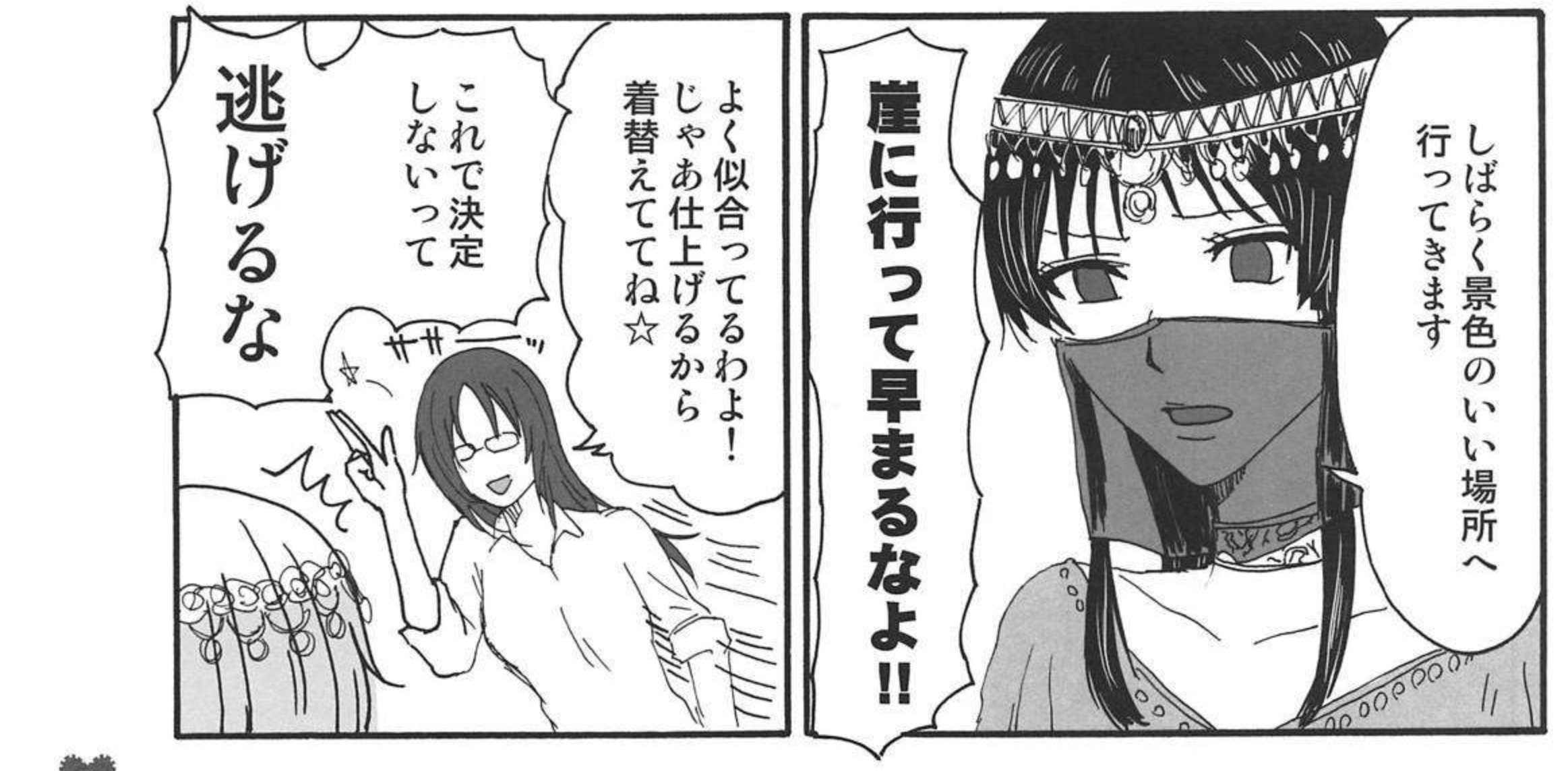
あーずにゃんこ
（唯の声真似）
!?
ふにゃぁぁぁ!!
ずるいよ～！
唯先輩の真似は～！
姉妹末おそろしいよ！そっくりだよ！
あのさ～憂
さっきの声で
「あずにゃんあいしてる」
って言ってみてくれない？
ドキ
ドキ
おねえちゃんに
たのみなよ…
めっ!!
『あずにゃんこ』

CANDY

村崎

さわちゃんの作った衣装が性的だった件

こんなのでステージに立てるわけがないだろ！



こんなんじゃ
ライブどころじゃない
澪ファンが出るぞ…

脱いでる!?

どきーん!!

え?
着替えてろって
言われたし

せっかく
我慢
してたのに…

何?

ぶっ
ぶっ
ぶっ

!

どきっ

ぎゅっ

他の人に
この衣装の澪は
見せられない
あぶない

あぶないのは
律だろ!!

…っん…律…

だめだってば！

もう!!

大丈夫だって

何も大丈夫じゃない…

ちゅ、
ちゅ、
ちゅ

おっぱい

がぶっ

いっ…
噛んじゃ
ダメ…ッ…！

ダメって…
んっ

ぺろ

言ってるのにっ

がぶっ

ズニッ

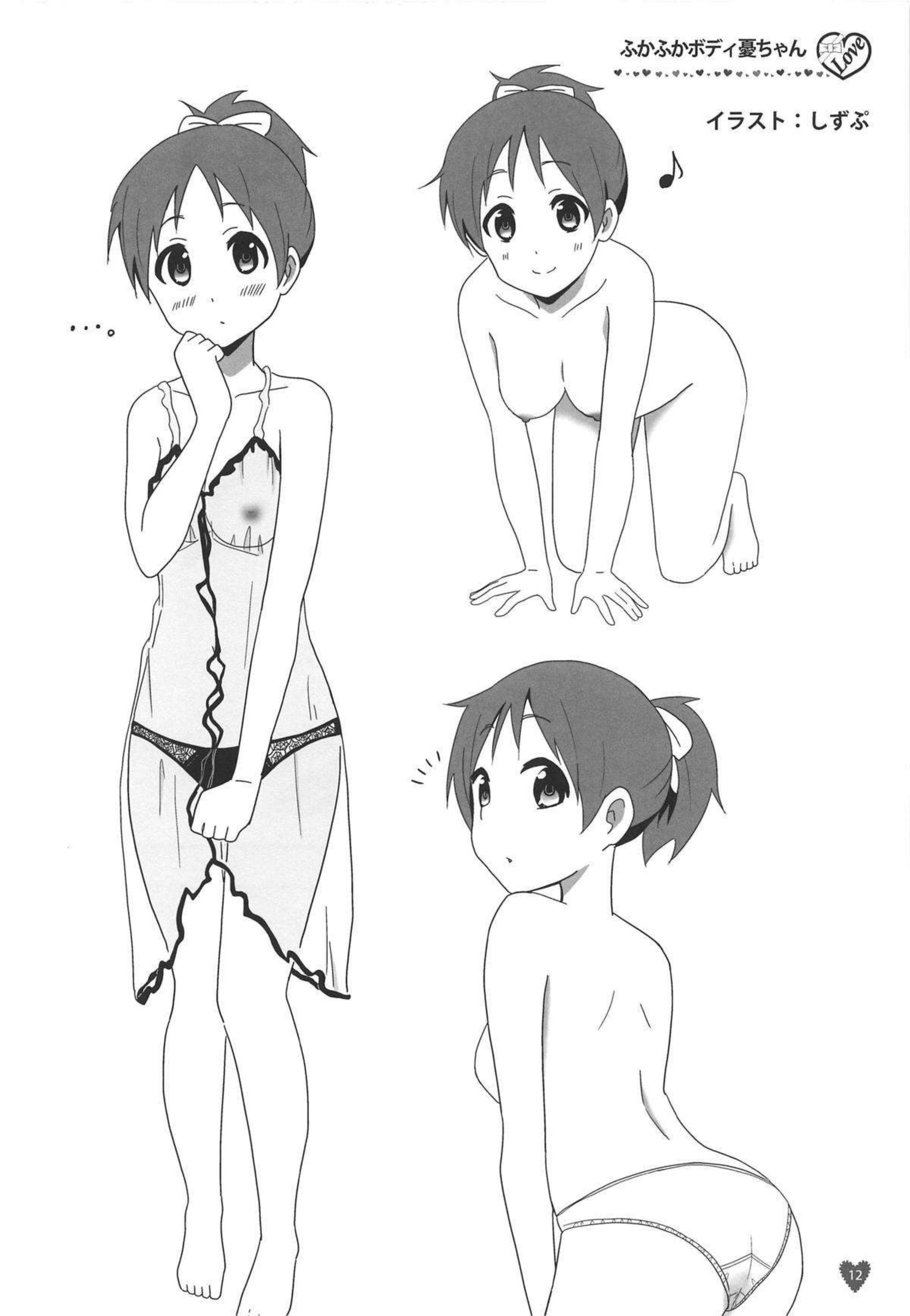
むっ

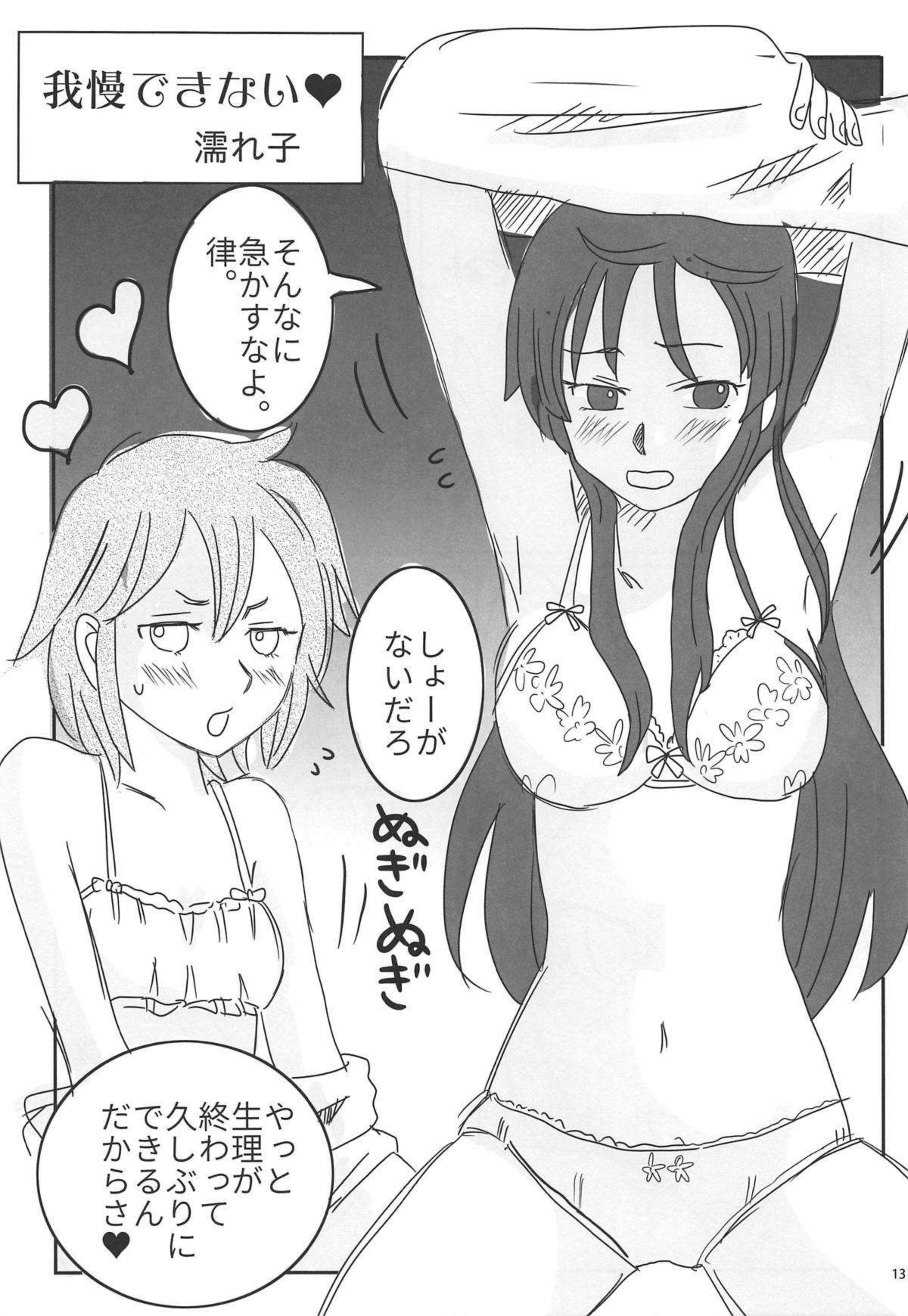
——ッ…ふっ…

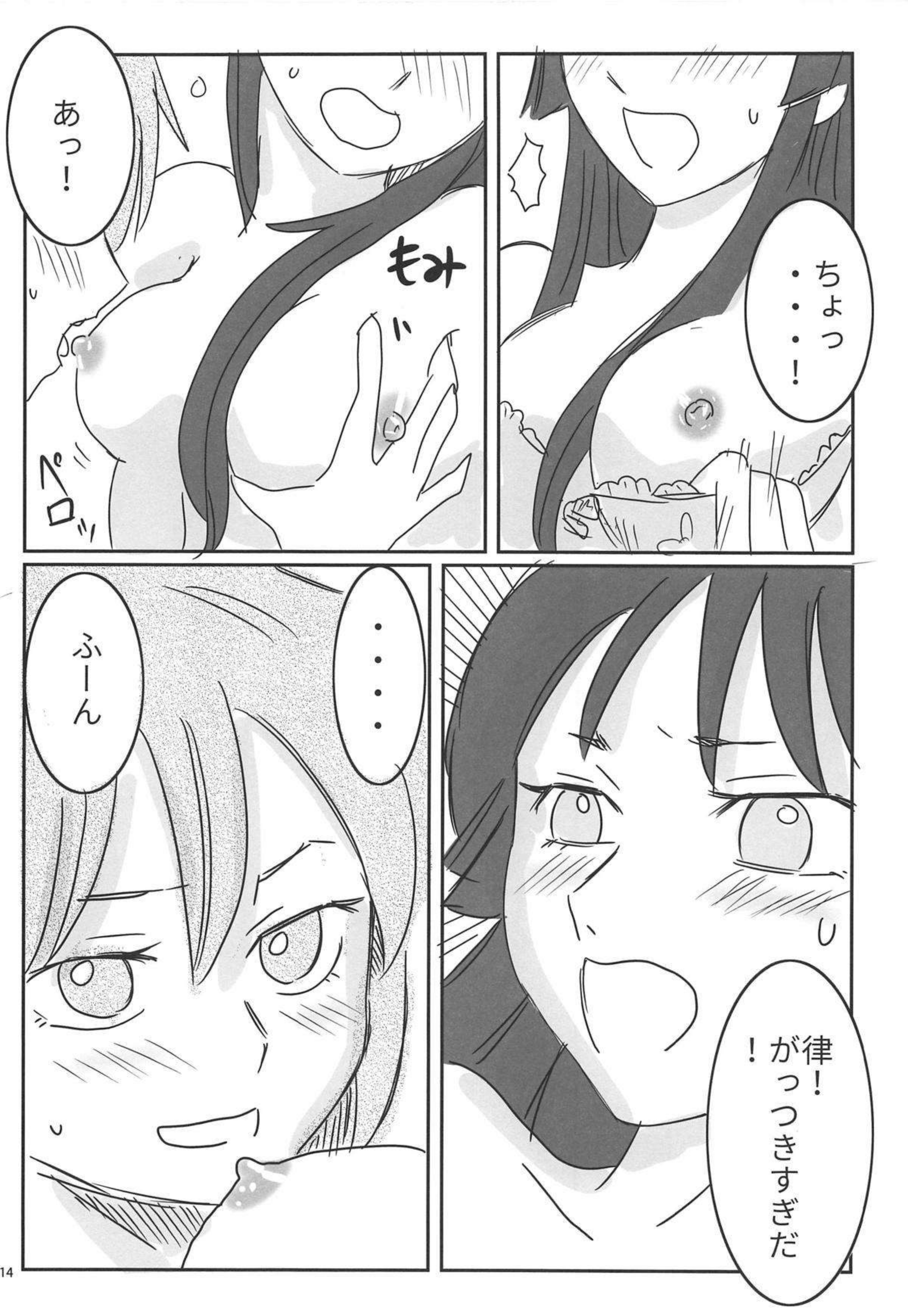
ちゃんと
舐めといた方が
いいよ

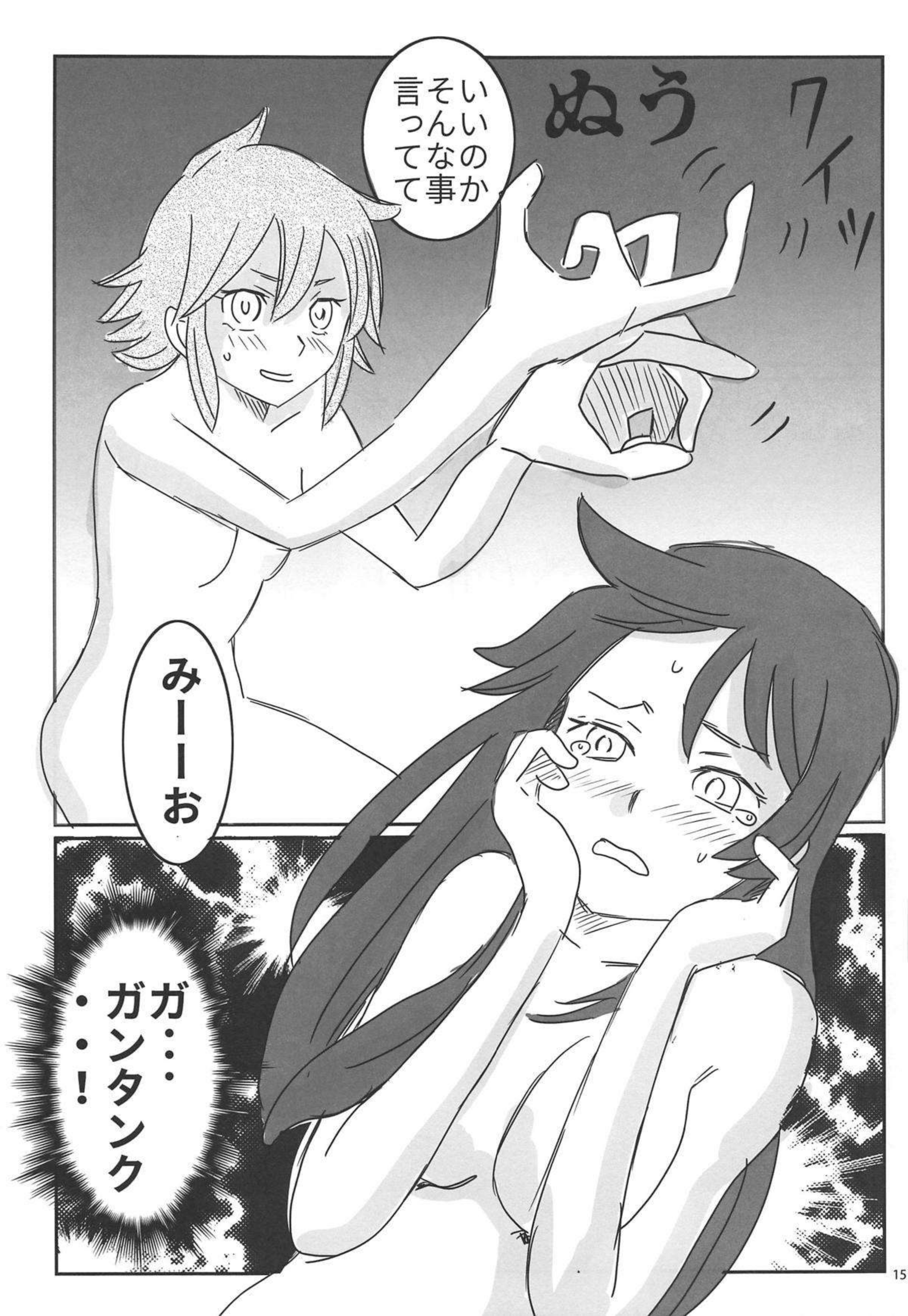
ん…
みな
みな
ドキ
ドキ
ドキ

イラスト：しずぷ




我慢できない♥
濡れ子
そんなに急かすなよ。律。
しょーがないだろ
ぬぎぬぎ
やっと終生理久しぶりにだけかきがらるさん♥


ちょっ・・・！
あっ！
もみ
ぺロッ
律！がっつきすぎだ！
・・・・
ふーん


いいのか
そんな事
言ってて
ぬう
ワイツ
みーーお
ガ・・・
ガンタンク
・・・！

へへ

もう準備万端みたいだけど？

澪しゃん♥

あっ！コラ！

ぬるっ

あっ！

ビクッ

ああっ！

んっ！

んんっ！

あっ！

律う・・・キモチ・・・いいよ

ホント・・・澪可愛いなあ♥

ねえ・・・
私も・・・・
澪ー？

おねだり律

可愛い♥

きゅん

ちゅ

うん♥

くちゅ
あっ
くちゅ
んくっ
くちゅ
ハァ
ハァ
くちゅ
くちゅ
澪ー
りつぅ
ハァ
ハァ
ハァ
ああ

ビクニ

ああっ

ビクッ

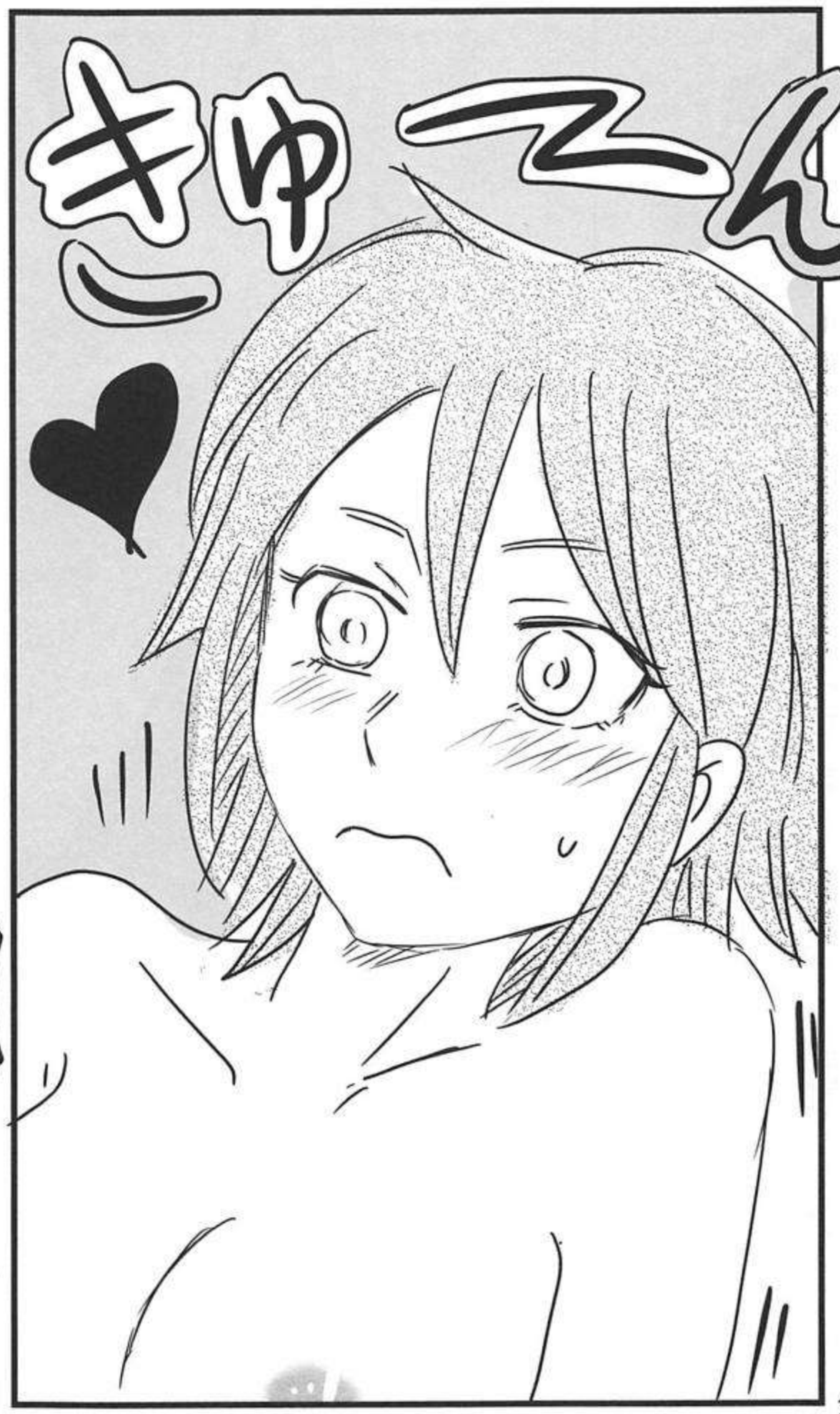
ああぁん！

ねえ律

んー？

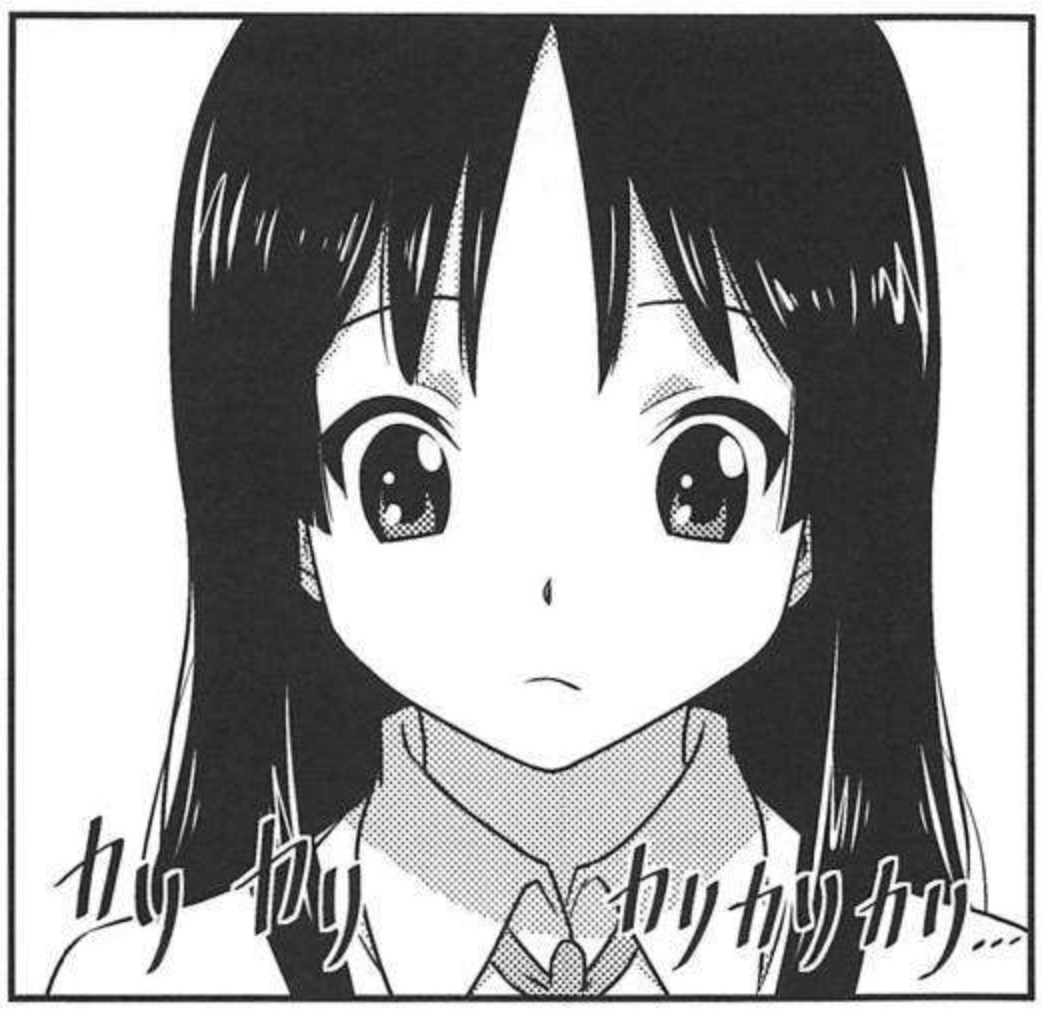
もじ

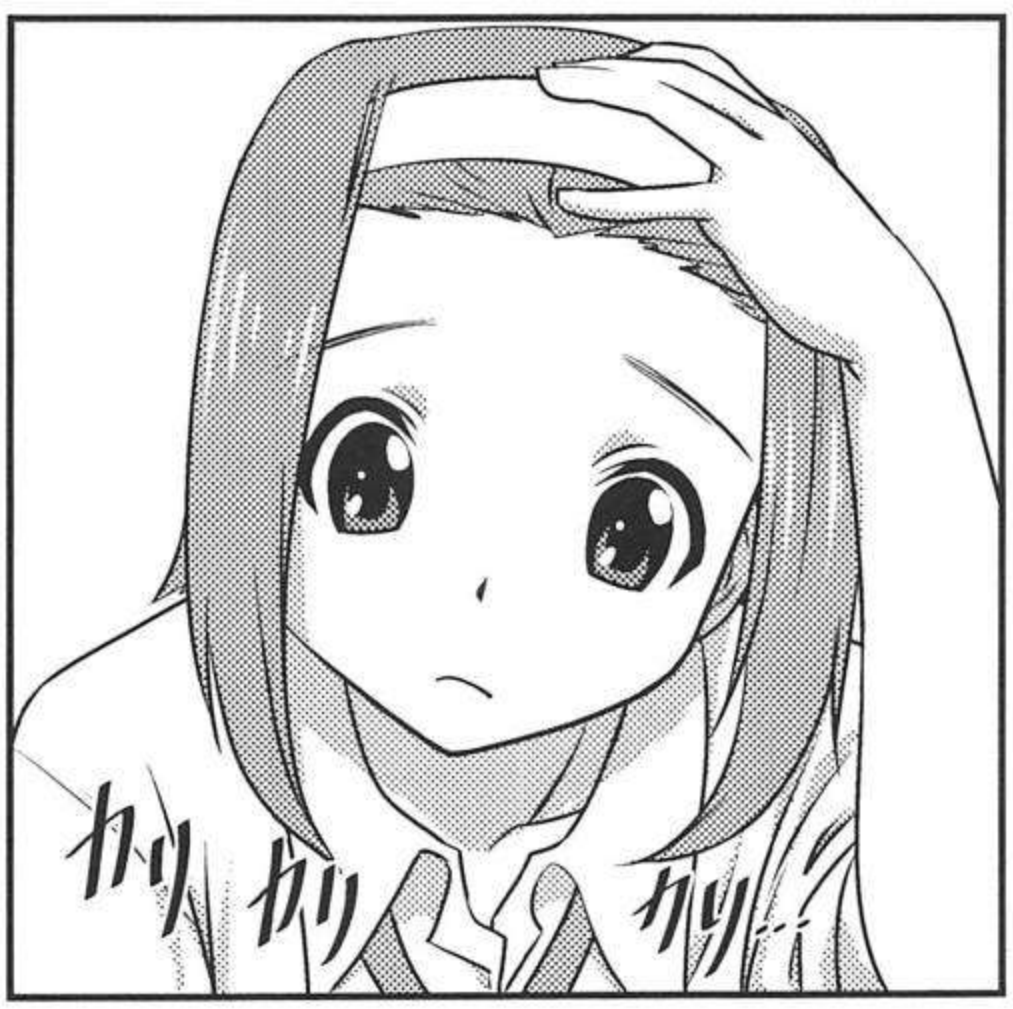
たくさんエッチしたら私たちの子供ってできないかな？

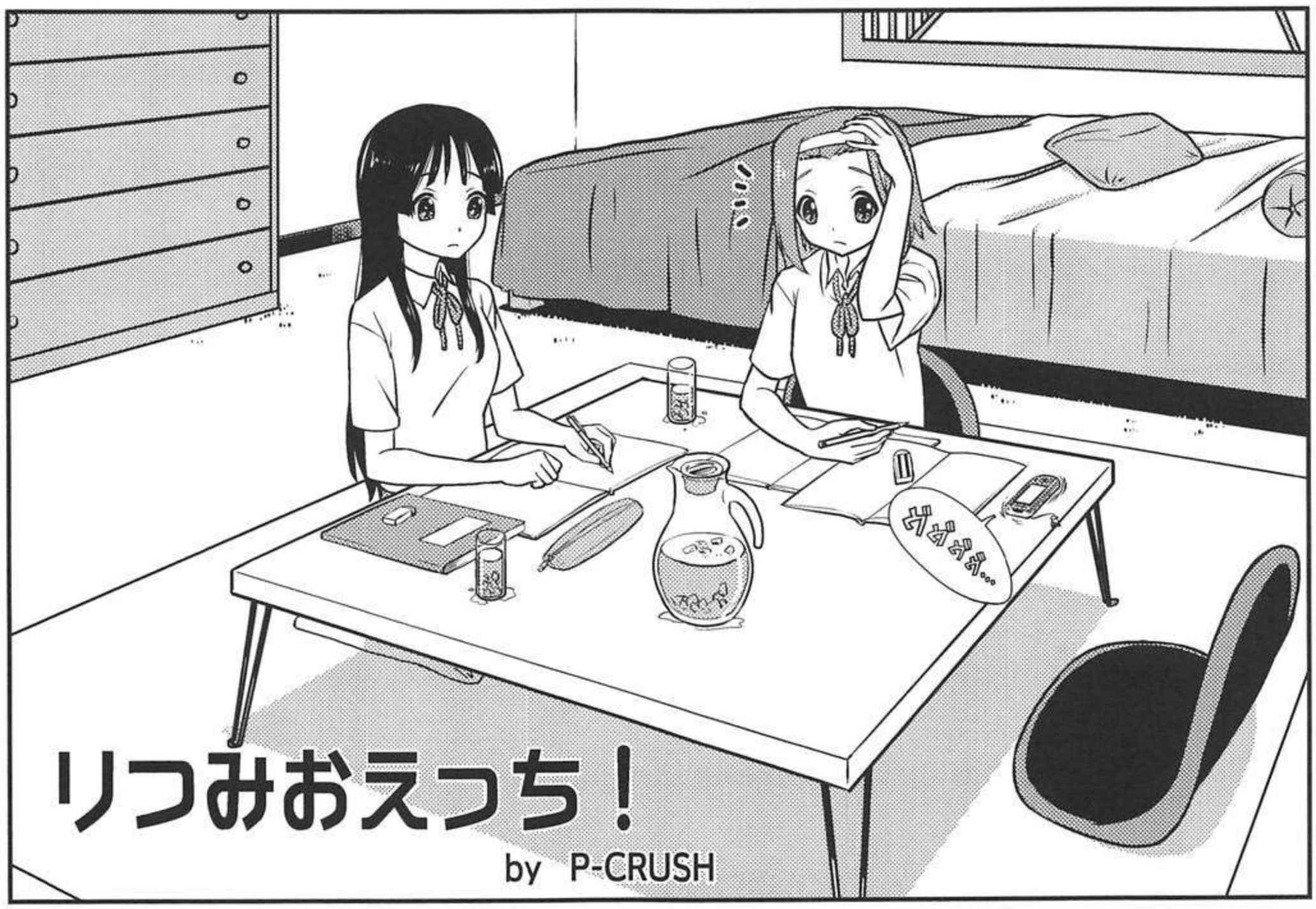


エンド・・レス？

あずにゃん、早く来て。
イラスト：天田じろー


カリ カリ カリカリカリ…


カリ カリ カリ…


ゲゲゲ…
リつみおえっち！
by P-CRUSH

あ、唯からメールだ
どれどれ～
P

どれどれ～

な…!?

りっちゃんゴメ～ン
今日は和ちゃんと一緒に
夏休みの宿題する
ういうことで、二人で
勉強頑張ってね

仲良し小好しな二人のお
邪魔は出来ないわね

- END -

MENU

返信

和と一緒に勉強するから来ないってこと

余計な一言入れやがって

今ので気が抜けちゃったし
ひと休憩しない？

うん
そうだな

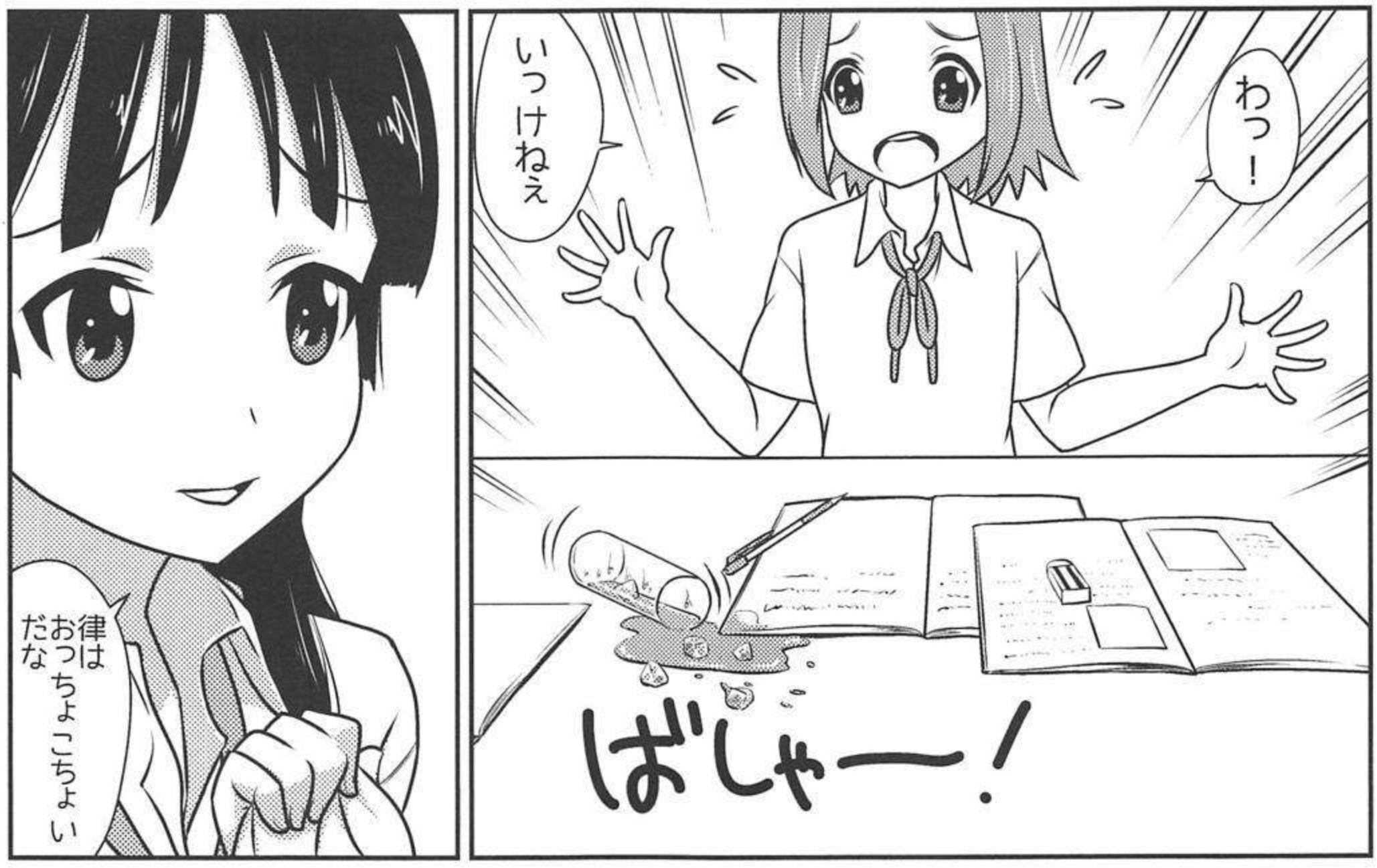
はぁ…
エアコン効いた部屋でも
集中すると汗ばむな

パタパタ

ぐい

ゴクリ

エアコンの温度下げようか？
お構いなく――
コッソリ


わっ！
いっけねぇ
ばしゃー！
律はおっちょこちょいだな

悪い悪い～自分で拭くから
いいからいいから
ふきふき

キラ
キラ
キラ
キラ
これくらいおやすいご用だ
……
……み
みお〜〜!!
ガバッ
!?
律へ?!?

今家には誰もいない

しょ？

ヒェッ!? ちょ…ちょっと！ いったいなにを!?

かぁ〜

ふる…

だだからって…こ、こういうの…は

ずっと澪のことを考えてた！

CHU♥

ん…

ちゅぱ♥

ちゅぷ♥

ちゅぱ♥

ちゅぱっ♥

続きはベッドで

…うん♥

み～お♥

あっ♥

あっ♥

や…だ パンツが汚れちゃう

クチュ クチュ

すり すり

ぐちゅ

ぐちゅ

ぐぬゅ

澪のは濡れまくりでもう凄いぞ！

あっ♥

ふふふ 後で洗濯すればいいから

すん♥

はあ はあ

でもパンツ洗ってる間はノーパンだよね ニャニャ

しッ

私だって！

ズーン

ダッ

律に凄いことするんだからっ！

ゾクッ

ゾクゾクー

はあはあ

あ♥

あ♥

あ♥

あ♥

レロ

レロ

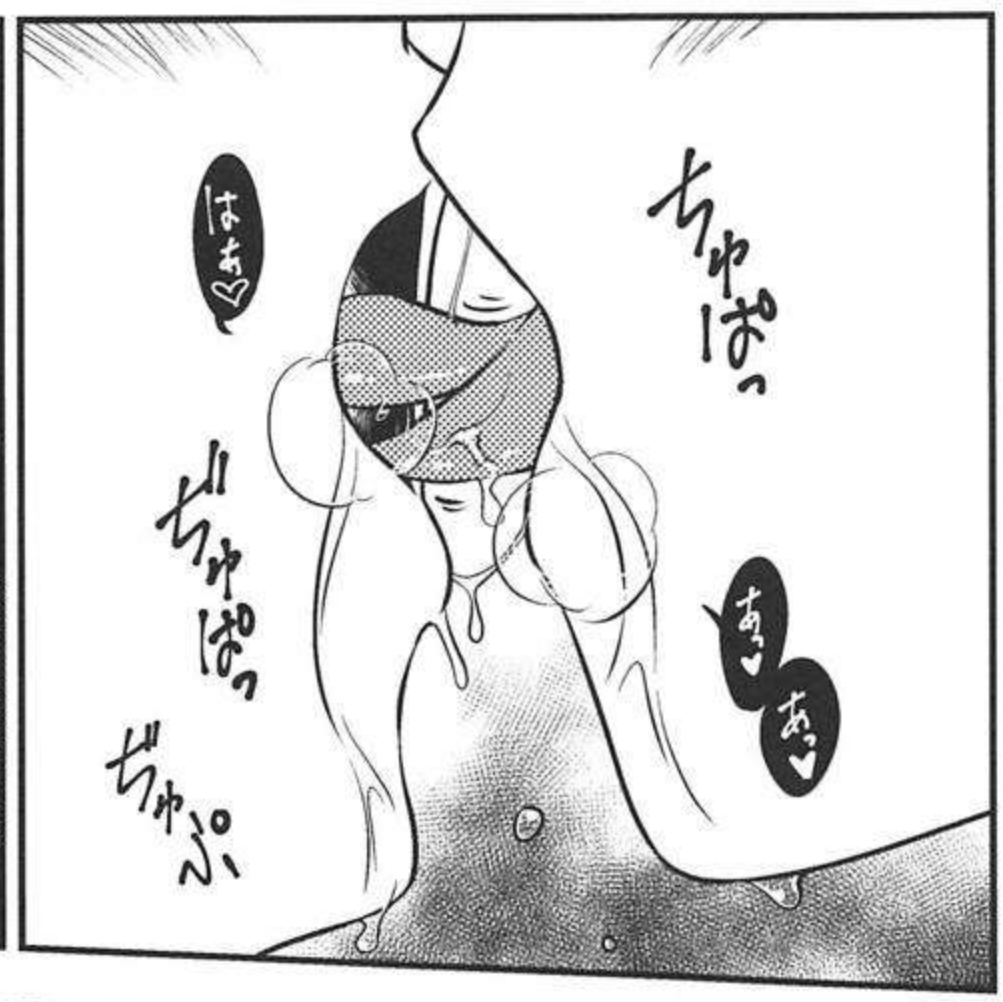
ぐちゃ

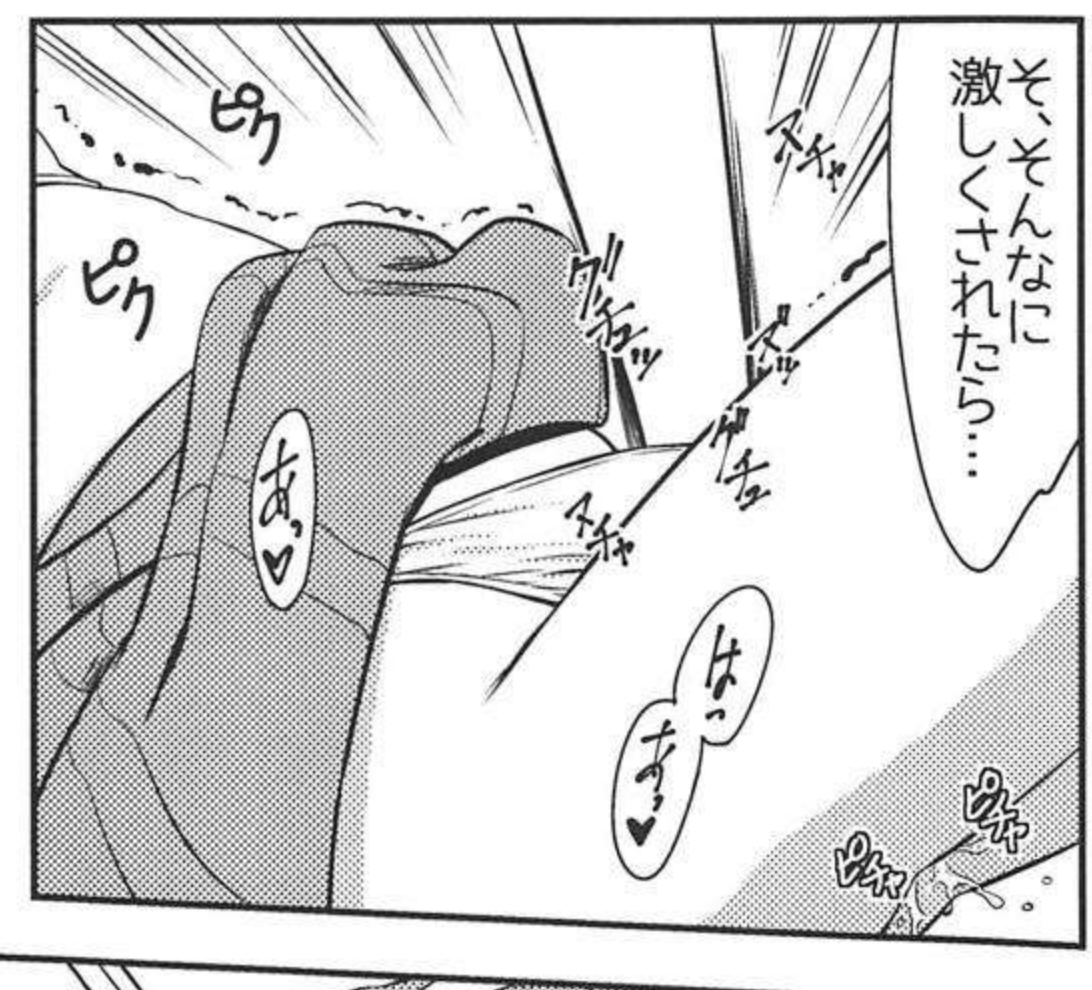
ぬちゃ

ぐちゃっ

グニュニュ

グルッ





はあああああああ!!!

澪って手先が器用だもんな

油断してた

はぁ—

はぁ

ちゅぱ

私だって律のことばかり考えていたからな

律が気持ち良さそうで嬉しかった

みお

カプ

プチッ

あっ…律
な、なにを!?

はむ

はむ

ペロッ

ピチャ ピチャ

あっ♥

あっ♥

そ…そんなこと
されたら…

あん♥

プニ

プニ

はっ♥

さっきよりも
澪のあそこから
凄くあふれてる!!

あん♥

あっ♥

りつ…や
やめて…

ゾク
ゾク

ムチャ

ムチャ

ウフフ
やめないよ

カリリッ

ビクン
ビクン
ブル
ブル
ブル
ああああぁぁぁぁりつぅ――!!!
ーすぅーすぅーすぅー

END

ゆしゃあす
シンドローム
作:しょうのすけ

ゴゴゴゴゴゴ…

あずにゃん、こっちにおいで…

えっ、あ、あの…

さ、遠慮しないであずにゃん

ゆいの部屋 yui's room

べ、ベッドでなにするんですか…

ええじゃないかあずにゃん、ええじゃないか

ダメです！ちゃんと宿題しないと…

あっ ゆ、唯センパイ…

あずにゃん…スケベしようや…

ヌゥゥゥ…

そういうんじゃないんです…！

あの、私…！

ガニ

そういうのってどういうの？

あっ…

ぷぷぷ

スッ…

こういうの？

ムチュ

ムチュムチュ

んっ…

んむぅっ…

ゆ、唯せんぱい…

はあっ

ドキドキ…

はあっ

キス…

しちゃったね

あずにゃん…

ひどいです
唯センパイ…
こんな強引に…

ごめんね
ごめんね
ごめんね
ごめんね
あずにゃん…！

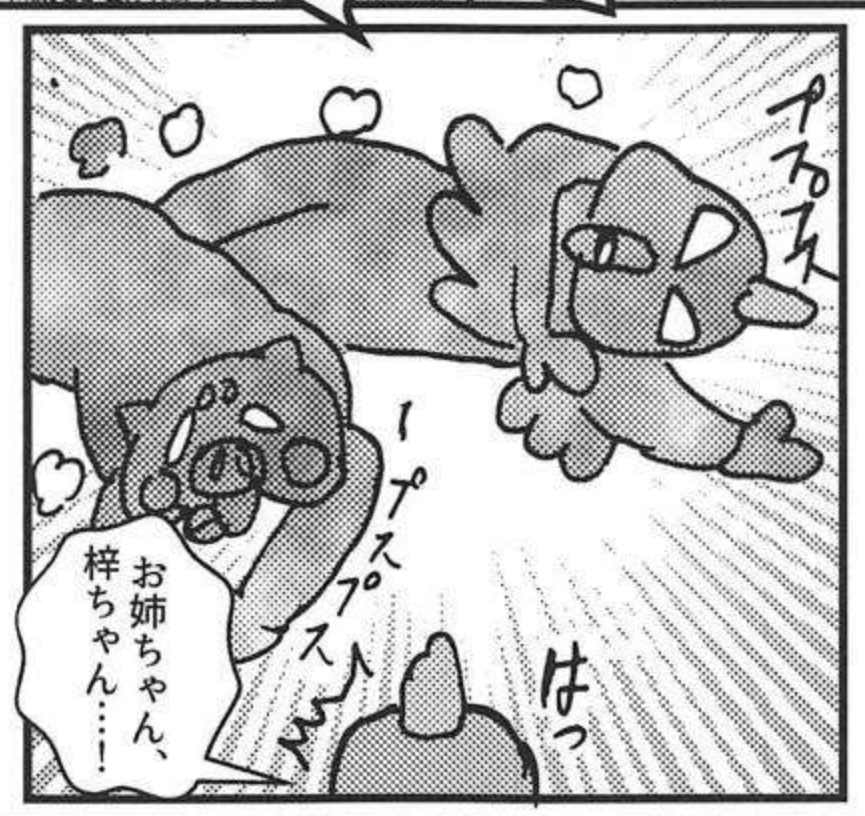
唯センパイが
イケないんですよ…
あ、あずにゃん…
私…
もうっ！
唯センパイッ！
あっ
はっ
あっ
あずにゃっ
ゆいひぇんぱいっ
ゆいひぇんぱいっ
んっ、あずにゃ…
トサカ
つめぇぇぇぇぇぇ～っ

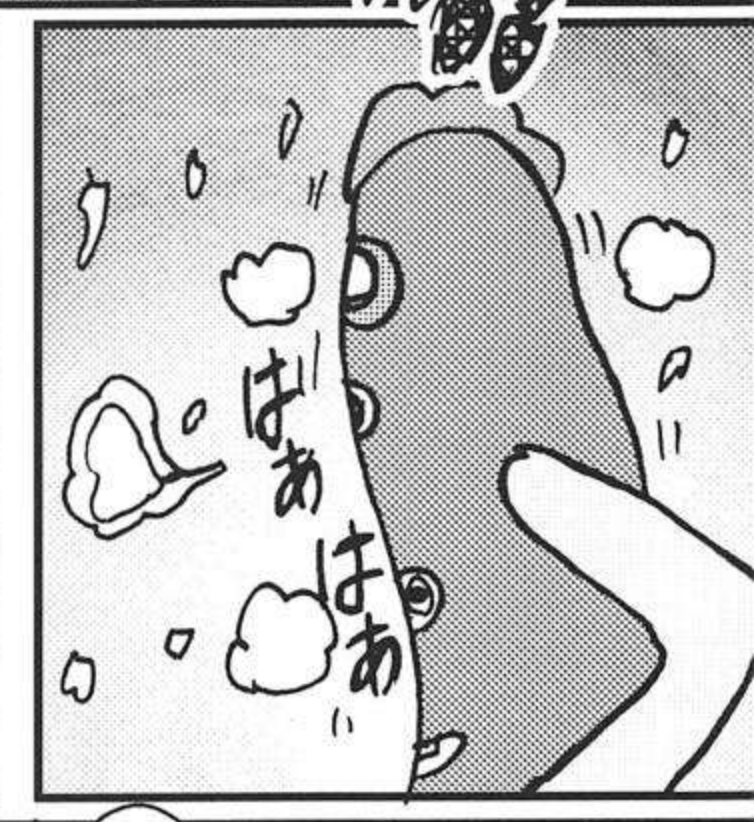
!?
お姉ちゃん…
梓ちゃん…
何してるの…?
ハッ
ガクガク
ブルブル
うつ
憂!!

ゴゴゴゴゴゴゴゴ
ワナワナ
プルプル
アーセ
アセ
フフフフフフ
うっ、憂！これは、あの、その…
ち、ちがうの憂！私たち、そういうんじゃ…
梓ちゃんのドロボウ猫ッ!!
ぎゃあああああああああああああああああああああ
あずにゃーーーーん!!

お姉ちゃんの
裏切り者ーッ！

ぎやあああああああああ
ああああああああああああああ





そして彼女は
贖罪の旅に出た…

姉と親友の
形見のギターと共に…

行く先々で人々のために
ギターを奏で、唄い…
そして時には巨悪と戦った

彼女が十六度目の宇宙の危機を救った時、
彼女は自分が一体何のために旅に出たのか、
それどころか自分が何者だったのかも
分からなくなっていた…。
それでも彼女がギターの弦をつま弾くと
彼女は自分の中の芯が暖まるのを感じた。

彼女が弾き語る歌が、そしてその歌に
心動かされた人々の笑顔が
彼女を彼女たらしめる原動力だった

長い、
とても長い年月が過ぎ去ったある日の朝、
彼女は地図にもない小さな町の優しい夫婦の家で
眠るように息を引き取った。
常に肌身から離さなかった二本のギターと共に
眠る彼女の顔は安らぎに満ちていた…。

-fin-

夢中で好きして

文・イラスト BELI-TREE
イラスト仕上げ 屑コウ

とある春の日のとある豪邸のテラスでの事です。そこには2人の見目麗しい少女がいました。1人は高校生くらいの少女で笑顔が柔らかく、花に例えるならフリージアの様な気高さと明るさがありました。もう1人は背の高さは少し低い程度ですが、線が細くもっと幼いようです。こちらは花に例えるなら黄金色のパンジーといったところでしょうか。幼い方の少女は何故かロングスカートのメイドっぽい服を着ています。幼い方の少女は室内からティーセットを持ってきた様で、ティーカップをもう1人の少女の前に置きました。

「紬お嬢様、紅茶が入りました。今日はタルボのダージリンムーンライトです。春らしい上品な香りをお楽しみください。」

「菫ったら、またお嬢様って」

「あっ！このメイド服を着るとどうしても気持ちがお仕事モードになっちゃって」

「今は私と二人っきりなんだし、別にメイド服を着なくてもいいのに」

「私結構この服好きですよ。可愛いと思いません？それにメイド仕事って服も汚れ易すいから」

「あなたが好きなら別にいいのだけど」

年上の少女はこの屋敷の主人の令嬢で名前を琴吹紬といいます。そして、幼い方の少女は斉藤菫といいます。斉藤家は琴吹家に代々使えている家柄で今の執事長も少女の祖父が努めており、少女自身も学校に行く傍ら昨年から紬の身の回りの世話をするレディースメイド見習いとして仕えています。その為、菫は紬をお嬢様と呼ぶように言われていますが、小さい頃から姉妹のように育った2人は回りに他の人がいない時はそういった呼び方をしないという約束をしていたのです。

「それより、今日の紅茶はどうですか、初めて淹れてみたブランドなんですが」

「苦味がなくってとっても上品な甘みがあるわ、それに口の中にふわっと花のような香りが広がってとても美味しいわ」

「早朝に手摘みされたファーストフラッシュらしいですよ」

「菫もだいぶ紅茶淹れるのが上手くなったわ」

「そうですか、嬉しい！でも、お爺ちゃんにはまだまだって言われるんですよね」

「斉藤は身内に厳し過ぎるのよ。この紅茶本当に美味しいわ」

「えへへ」

優雅に紅茶の味と香りを楽しんでいた紬でしたが、そのとき何かを思いついた様です。突然顔を輝かせながら菫にこう聞きました。

「ねぇねぇ菫、私もお友達にこんな美味しい紅茶を淹れてあげられる様になるかしら」

「え、お姉ちゃんが？」

「そうそう、私も来週から新しい学校に通うでしょ。そこで知り合ったお友達に私が淹れたお茶を飲んで喜んで貰えたらとっても素敵だと思ったんだけど」

「お姉ちゃん、茶道部にでも入るの!?」

「いいえ、合唱部に入るつもりよ。みんなで合唱したら喉が乾くじゃない。そこで私の淹れたお茶を飲んで貰えないかしら」

「学校にはティーセットは無いと思うけど……」

「それなら、うちから持っていけばいいじゃない。数は充分あるでしょ」

「それは余る程有るけど、いいのかなぁそんな事して」

「大丈夫よ、きっとみんな喜んでくれるわ。その為には私も紅茶淹れる練習をしないとね。だから菫、教えてほしいの」

「私はいいけど、お爺ちゃんに怒られないかなぁ」

「ね、お願いよ。私普通の女の子達と普通に仲良くなりたいのよ」

「それって普通でしょうか？」

「少なくても執事にかしずいてもらってのティーパーティーとかよりは普通だと思うけど」

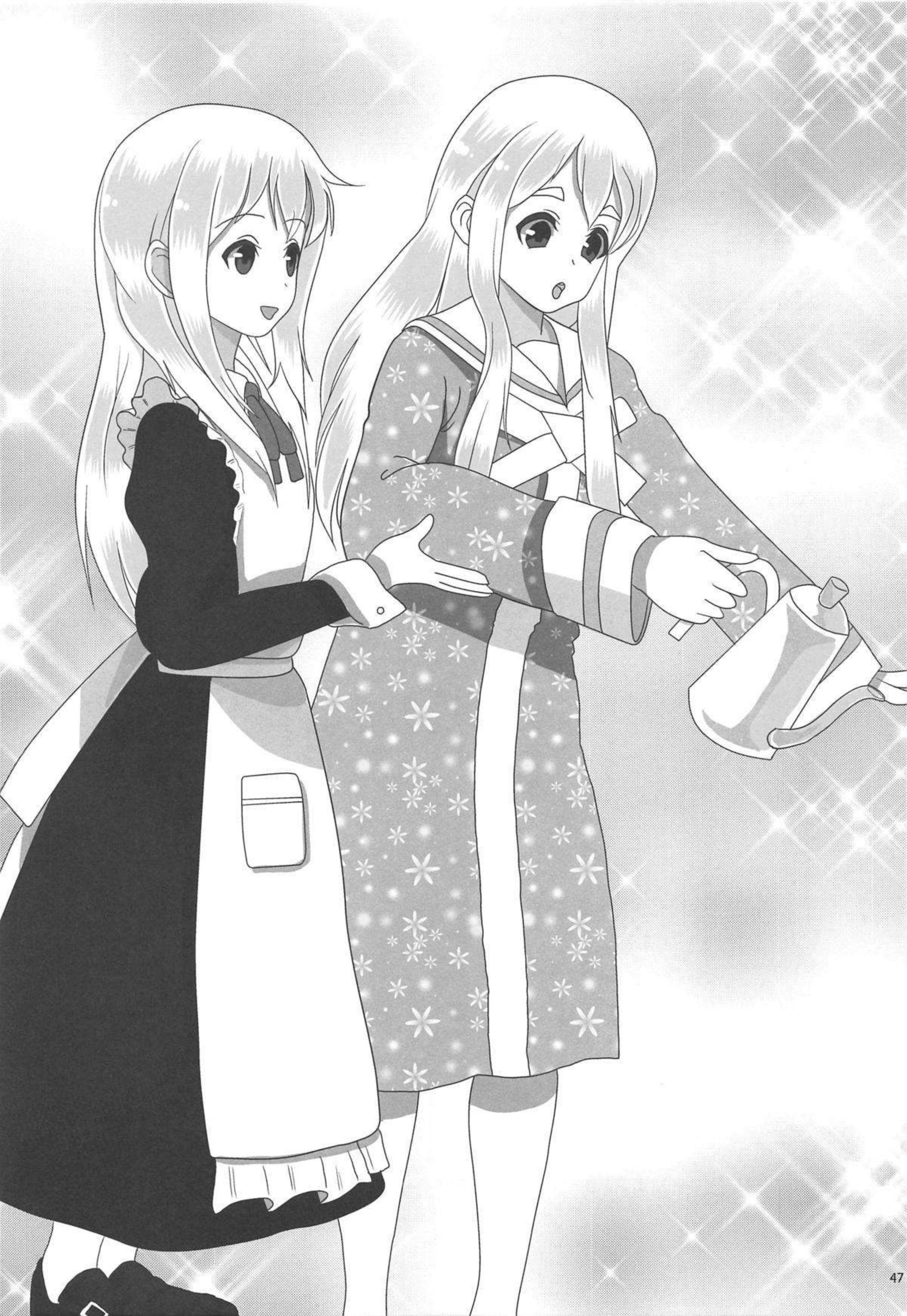
「そうかもしれないけど」

「あなたは私のレディースメイドなのだから本来は執事長といえども口を出す権利は

無いはずよ」
「でも、私はまだ半人前の見習いなので」
「もしなにか言われたら、私から強引に頼んでいるのだって言ってあげるわ」
「……じゃあお姉ちゃんの部屋のミニキッチンを使って少しやってみようかな」
「そうね、あそこなら邪魔も入らないだろうし」

＊　＊　＊

こうして、紅茶の淹れ方を勉強する事になった紬は自分の部屋に戻り、菫も後から道具を揃えてやって来ました。そして二人は早速紅茶の入れ方を実際にやってみる事にしました。
「まず、お湯が軽く沸き始めたら、まずはそれをポッドに注いで温めます」
「ふむふむ、こうね」
「そうしたら、ケルトはもう一度コンロに戻して完全に沸騰させます」
「その間にさっきのお湯をポッドから捨てて、リーフを入れるのね」
「リーフはいれますが、ポッドに入っていたお湯は今度はカップの方に注いでそちらを温めてください。お湯が完全に沸いたらポッドにお湯を注ぎます」
「こうかしら」
紬はケトルを持つとそっとポッドにお湯を注ぎましたが、それを見た菫は後ろから手を添えてケトルをもっと上の方に持ち上げました。
「もう少しケルトを上に持ち上げて勢い良く注いでくださいね。そうすると、中でリーフがくるくる回り始めます」
「わぁ～リーフが中でダンスしているわ」
「慣れるまでは中のリーフの様子が分かるこういったガラス製のポッドがオススメです」
「どの位、このまま蒸していればいいのからしら」
「このリーフの場合は少し温度が下がった頃が飲み頃らしいので、5分くらいですね。リーフによってオススメの時間がありますが、だいたいは3～5分位ですね」
「うわさに聞くカップ麺と同じくらいね。こうして見ていると段々と深い色合いになっていくのが楽しいわ」
「このリーフはどちらかというと色合いが淡いタイプですが、でも独特の深みはありますよね」
少しの間二人は並んでポッドの中をみていましたが、そうしていると仲の良い本当の姉妹の様でした。紅茶ができたら次はそれを運ばなくてはなりません。
「まず、カップを載せたお盆を胸の辺りまで引き上げて、息がかからないように少し胸から離します」
「こんな感じかしら」
「腕は体にぴったり付けないで少しだけ開くてください」
しかし、姿勢は良いものの何故かお盆が細かく震えています。菫が紬の顔を見るとなにか一生懸命こらえている感じでした。
「お姉ちゃん？どうしたの？」
「だって、あなたったらさっきから先生口調なんですもの、なんだかそれが面白くって」
「あっ！でも笑うことはないじゃないですか」
「だから我慢してたんだけど……」
そう言っているそばから紬の表情は緩んできて、とうとう吹き出してしまいました。そして、その拍子に持っていた盆がぐらりと傾いてしまい。
「あっ、お姉ちゃん危ない！」
そう叫んだ菫は一歩踏み出してお盆を支えようとしましたが、大きく揺れたカップはお盆から落ちてしまいました。運悪く踏み出していた菫の足の真上に。
「熱い！」
「菫、大丈夫！そこのイスに座って、濡れた靴とソックスを脱いで頂戴」
紬は菫を椅子に座らせてロングスカートをたくし上げると、自分は水で濡らしたタオルと取って来て素足になった菫の足を丁寧に拭き始めました。
「菫、ごめんなさい、ごめんなさい、熱かったでしょ」
「お姉ちゃん、大丈夫よ。この位のやけどは慣れてるし。この間なんて料理の勉強でイカをフライにしようとしたら爆発させちゃって油を飛ばしちゃって大変だったし」
「私がもっと真面目にやっていたらこんな事には……」
「それは、次から気をつけましょ」



「ごめんなさい……」
見ると紬は目に涙を貯めてこちらを見上げています。確かに足はまだヒリヒリしましたが、そんな姉代わりの人を見ると胸になにか暖かいものがこみ上げてくるのを菫は感じました。そして、自然とその髪を撫でていました。
「菫……」
「お姉ちゃん、私は大丈夫だから少し足を冷やしたらまた最初からやり直しましょ」
「でも、足が赤くなってしまって痛そう」
紬はそういうと、顔を菫の足の赤くなっている部分に近づけて、何を思ったか舌を伸ばしてそこをペロペロと舐め始めました。
「お、お姉ちゃんなにを」
「だって、痛そうなんですもの。唾液には抗炎作用のある成分も含まれているっていうじゃない」
と、言って紬は足の甲を舐め続けます。
「お姉ちゃん、足なんて汚いし、そこまでしなくてもいいから」
「菫の体に汚い所なんかないわ」
そう言うと、今度は甲の上から下まで舌の先端で一気にツッツッーと舐め下ろしました。その動きは菫にくすぐったいとも違うなんとも表現しがたい感覚を与えました。
「ん、んん、お姉ちゃん……」
「指の方も少し赤くなってしまっているわ、こっちも舐めてあげる」
「え、え?」
紬はそう言うが早いか今度は足の親指を舐めるというか、口に咥えてしまい唇と舌で優しくまるで愛おしむように舐め始めました。普段靴や靴下に守られてあまり意識していないですが、足の指先も手と同じ様に感覚神経が集中している部分です。そこをそんな風に舐められてしまい、菫は初めて体験する感覚になぜか心臓はドキドキし始め、顔も少し上気してくるのを感じ戸惑ってしまいました。一方、紬の方はそんな菫の様子には気がつかず一生懸命指をペロペロと舐めているものの、やはりなにか背徳めいたものを感じて、こちらもちょっとドキドキとしていました。
(それにしても菫の足ってば指先までスラリとしているし、まだちょっと華奢な感じが可愛いわ、なんでこんなに愛おしく感じてしまうのかしら)
と、紬は思いながら指と指の間まで舌を思いっきり伸ばして丁寧に舐めあげていきます。舐めるほどなぜか愛しい気持ちがこみ上げてきて、彼女は夢中になって舐め続けたました。菫はその舌の少しだけザラっとした感じと唾液のヌルっとした感触を普段何も触らない指の間、皮の薄い部分で敏感に感じてしまい、そこから上がってくる感覚に戸惑っていました。もしこれが全然知らない誰かだったら気持ち悪くしか感じなかったのかもしれません。しかし、いま目の前でそれを行っているのは、彼女が小さい頃から一番慣れ親しんだ存在、一番気を許した人であり、嫌悪感を感じる筈が有りませんでした。それにしても、くすぐったいとか、こそばゆいという感覚とは別にどこか痺れる様な感覚が舐められているところから湧き上ってくるのが彼女には不思議でした。
「お姉ちゃん、お姉ちゃん!」
足から湧き上ってくる不思議な感覚にどう対処していいか分からず、菫は切なそうに紬に呼びかけることしかできませんでした。その声を聴いてハッと我に返ったのは紬の方でした。菫の顔を見上げると彼女の頬は薄くですがバラ色に上気し、目も少し潤んでいます。その顔に今まで感じた事のなかった気持ちを胸の奥で感じると同時に自分が夢中で足を舐めていた事を恥ずかしく感じてしまいました。
「菫、まだかなり痛むの?」
「最初程はもう傷くないよ」
「そう、それは良かった。でも私の唾液で足がベトベトになってしまったわね。私はガーゼとか貰ってくるから、そこの浴室で足を綺麗にきてはどうかしら」
「うん、そうするね」
菫は軽くびっこを引きながら部屋についている内風呂の方にトコトコと歩いて行きました。それを見送ってから紬は薬を貰いに行きましたが、戻って来ても菫はまだ浴室から出ていませんでした。紬はひょっとして、浴室の床で踏ん張りが効かなくって倒れたりしていないか、ちょと心配になって様子を確認しに行くことにしました。

* * *

脱衣場に入り、浴室の扉を軽くノックしてちょっと待ってから扉を開けて中の様子

を伺います。部屋付きの内風呂といっても琴吹家のことですので、5、6人くらいは余裕で入れるくらいの広さはあります。薄い湯気の向こうに菫が服を脱いで座っていました。

「菫、どうかしら」

「足を水につけて冷やしていただけだから大丈夫。もうだいぶ痛くなくなってきたよ」

「そう、でもまだ力は入れにくいでしょ。そうすると浴室のタイルの上じゃ歩きにくいでしょ」

「うん、ちょっと歩きにくいかな」

「じゃあ、ちょっと待っててね」

「え?どうするの」

しかし、ちょっと待ってと言うが早いか紬は扉を閉めてしまいました。そして、再び扉が開いた時には紬も衣類を脱いだ状態でした。

「お姉ちゃん、どうしたの」

「午前中、二人で花壇のお世話したときに少し汗かいちゃったから、私もシャワー浴びようかと思って。それに、足の踏ん張りが効かないと体ひねったりしにくいでしょ。だから背中洗ってあげるわ」

「背中くらい自分で洗えるよ〜」

「だめよ〜 今日は私がやるの」

そう言いながら紬は楽しげに中に入ってきました。菫にしても紬が塞ぎこんでいるよりは楽しそうにしている方が嬉しいのでそれ以上は止めたりはしませんでした。入って来た紬の体は菫の記憶にあるよりだいぶ女性らしい丸みをおびてとても綺麗な曲線を描いていました。菫はその曲線に少し見惚れると共にそれに比べると自分の体はまだ男の子みたいだなぁ。歳の開きがあるから仕方ないけど、早く追いつきたいなぁと思いました。

「2人でお風呂入るの久しぶりね」

「去年まではよく一緒に入っていたのにね」

「あの頃に戻れたらいいのにってたまに思うわ」

「そうですね」

「さっ、背中洗ってあげるわ」

紬は喋りながら背中を洗う準備をすると菫の背中側に立って洗い始めました。

「このくらいで大丈夫、痛くない?」

「ちょうどいいです」

「それにしても、こうして改めて見るとこの1年で随分背が伸びたわね。そのうち私より背が高くなるんじゃないかしら」

「クラスでも一番背が高い方になっちゃったんですが、あんまり背が高くなり過ぎても困ります」

「菫はすらっとしてるから背が高くなっても可愛いし、きっとカッコイイわよ」

「そうかなぁ、デカ女とか言われないかなぁ」

「あら、気になる男の子でもいるの?」

「まさか、いないよ〜」

「でも、菫ってばきっとモテる様になると思うわ。だって可愛いんだもの。それに、最近とみに大きくなり始めたこのおっぱい!」

紬はキャッキャと喜びながら、菫の膨らみ始めたおっぱいをワシワシと揉みしだきました。

「お、おねえちゃん、やめて! 痛い痛い!」

「ご、ごめんなさい。そういえば膨らみ始めって痛いのよね」

「何もしてなくてもジンジンしてくる事があって、この間お母さんに相談したら大丈夫って言われたけど」

「私にも覚えがあるわ、それ」

「それにお姉ちゃんみたいに丸みがなくってなんか尖っているのもカッコ悪いし、なによりカチンコチンに硬いのが不安で」

「じゃあ、姉としてどのくらい硬いのかもう一度確認を」

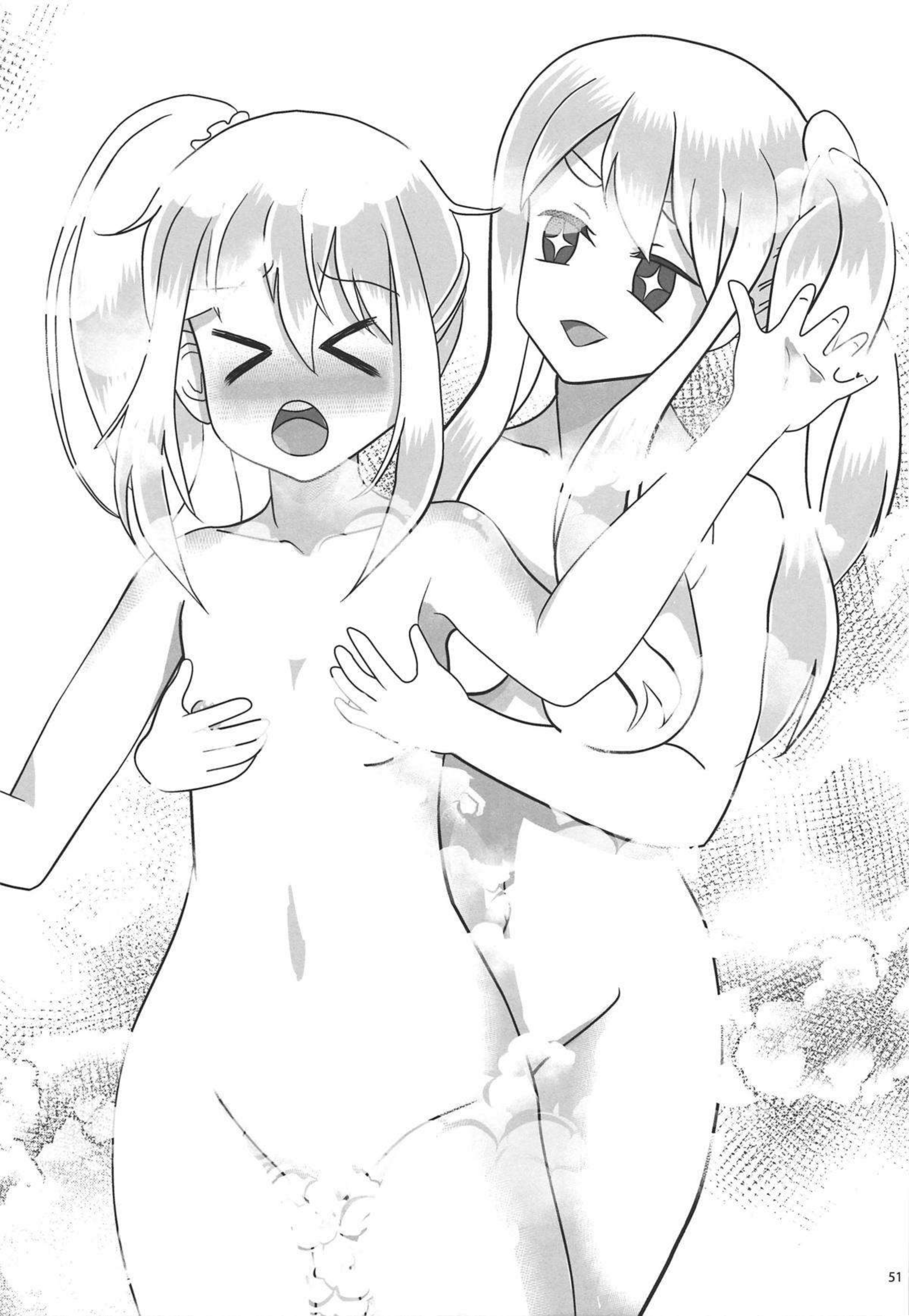
そういうと紬はニコニコ楽しそうに再び菫のバストに手を伸ばしてきます。

「おねぇちゃん!」

「冗談よ〜。大きくなり始めはみんなそうらしいわ。ある程度大きくなってから脂肪がつき始めて、少ししてから丸く柔らかくなってくるそうよ」

「じゃあ、大丈夫なのかなぁ」

「大丈夫よ、きっと。私も柔らかくなり始めたの最近だもの。菫はきっと大きく綺麗



なバストになると思うわ。あなたのお母様もそうだし」
「早くそうならないかぁ。せめてこの痛みだけでも止まって欲しいし」
「大人のバストと今は形が違うからブラジャーなんかも膨らみ始めの段階に合わせて専用のが売っているわ。そういうのってなるべく痛くならない様な工夫もされているの。今度２人でブラジャー買いに行きましょうか」
「ちょっと恥ずかしいけど、付き合って貰おうかな」
「まかせておいて～ 私がお世話になっているお店に行きましょう」
「お姉ちゃんの行くお店じゃ、私には高級過ぎないかなぁ」
「大丈夫よ。私普通の子がする普通のブラジャーが欲しくって探したお店だもの。いざとなれば私が買ってあげるわ」
「そこまでは悪いから」
「でも可愛い菫の成長のためだもの、私からも是非プレゼントさせて欲しいわ」
「お姉ちゃんがそこまで言うなら考えておくね」
「うん、絶対よ」
　そんなこんなを喋っているうちに菫は体を洗い終わって、ちょうど湯船もはれましたので少し先にそちらに入りました。少しお行儀が悪い格好ですが、火傷した方の足は温めてはいけないので湯船から出した状態です。少しして紬も体を洗い終わり湯船の方に来ました。湯船は充分に広いのに紬はなぜか菫の正面や横ではなく、背後から入りました。
「なんで後ろに入るの？」
「さっき、成長の話しとかしてたらちょっと昔の事思い出しちゃって、覚えていないでしょうけど菫って小さい頃お風呂があまり好きじゃなかったんだけど、私が抱っこして入ってあげると大人しく入っていたのよ」
「全然覚えてません。お姉ちゃんにそんな手数をかけていたとは」
「一緒に入るの楽しかったから、それは全然いいんだけど久しぶりに菫の事を抱っこしながら入らせて貰らっちゃおうかと思って」
「え……い、いいけど」
「では、ちょっと失礼します」
　そう言うと紬は菫の方によってきて、自分の足の間にその細い体を入れて、そっと手を胴に回しました。
「えへへへ」
「お姉ちゃんって、結構こういうスキンシップって好きだよね」
「そうなの、大好きなの。菫は嫌いなの？」
「お姉ちゃんとなら嫌じゃないけど……嫌じゃないけど、さっきから背中に、なんというか柔らかいものが当たっていて、気になるんですが」
　紬はそれ程強く抱き締めていた訳ではありませんでしたが、その胸の双丘は菫の背中にしっかりと張り付いていました。その柔らかながらも若さ溢れる弾力を背中に感じて菫はなんとも落ち着くかない気分でした。
「女の子同士だものこの位いいじゃない。それにしても菫のお肌スベスベね」
　紬はそう言いながら自分の指を菫の背骨沿いにつつっと滑らせました。それに電撃が駆け抜けたように感じってしまった菫は思わず悲鳴が口をつきました。
「ひっ！ な、なにして」
「だって、とっても滑りが良さそうだったんですもの。菫の肌って本当に手触り良くってずっと触っていたくなるわ」
　菫の透ける様な白い肌の上を今度は手の平でサワサワと撫で回します。
「お姉ちゃん、くすぐったいよ～」
　菫は手から逃げるように体をよじりましたが、でも紬は撫でる様に触っているだけなのに、何故かくすぐったいだけではなくどこか体の芯からジンジンするな感覚が湧いてくるのにとまどっていました。紬の方は逃げようとする菫の体を逃がさないと言わんばかりに先ほどより強く抱きしめました。
「こうして、２人でふざけていると小さい頃を思い出すわね。私やあなたのお父様が何を言っても２人いつまでも一緒にいましょうね。大好きよ菫」
　抱しめられ大好きよと言われた途端、菫の心臓は文字通りドキンとなり、鼓動は急激に上昇していきました。自分でもなんでそんな反応をするのか分かりませんでしたが、それでも何か答えないとと思い湯船から出していた足を引っ込めて、菫は紬の方に向き直りました。
「わ、私……」
「私？」

そう聞き返した紬が少し顔を寄せてきます。その少し開いた艶やかで柔らかそうな唇に思わず視線が吸い寄せられました。

「あら、菫ったら顔が赤いわ。もうのぼせてしまったのかしら」

紬は心配そうに覗き込んで、ますます２人の距離は縮まりました。もう、お互いの吐息が感じられる程近くです。紬が近くに寄ってくるのはいつもの事でしたが、この時菫は何故かむしょうに抱しめたい衝動にかられました。

「私も、お姉ちゃんの事が大好き！」

そういって菫も紬の事を思いっきり抱しめた、つもりでしたが気がつくと自分の唇に何か柔らかいものが触れていました。それが紬の唇であることに気がつくまでそれ程時間はかかりませんでしたが、気がつくとともにパニックに陥った菫は体を引き離さなくてはいけない代わりにかえってより強く抱きしめてしまい、結果よけいに強く唇を押し付けることになりました。

（マシュマロの様に柔らかくって、蕩けるように暖かい）

紬の唇から漏れる僅かな吐息を唇で感じながら、思考停止に陥った菫は惚けた頭でそんな風に思っていました。時間にすると僅かだったはずですが、菫にとっては永遠の様にも感じていました。突然の事に思考停止になっていたのは紬も同様でしたが、いち早く我に返り菫から体を離しました。引き離されたあとも少し呆けていた菫でしたが、紬のまん丸に見開かれた目に気がつきその瞬間文字通り血が引く様な感覚を感じ、我に返りました。

「わたし、なんてことを。お、お姉ちゃんごめんなさい！」

そう叫ぶように言うと菫は慌てて湯船から出ようとしましたが、あまりに慌てたために火傷した方の足で勢いよく立とうとしたものですから激痛が走り、痛みに耐え切れずバランスを崩してひっくり返ってしまいました。ザブンという音と共に盛大な水柱が湯船に立ちました。それを見て固まっていた紬も慌てて菫を湯船から引き上げて肩を貸して脱衣所に連れて行きました。

「お姉ちゃん、ごめんなさい、ごめんなさい。私ったら」

泣きじゃくる菫の体を、紬はバスタオルで拭いてあげていました。

「その話は後でいいから、まずは体を乾かしてその足の手当てをしましょう」

紬は菫の体を拭き終わると、下着をつけさせて自分も同じ様にしました。菫はそんな紬を目で追いかけながらも自分の唇を指でなぞります。そこにはまだ先ほどの甘く柔らかな感触が残っている気がしました。

（私、なんであんな事しちゃったんだろう。お姉ちゃんきっと怒っているよね。もしかしたら気味悪がれているかも）

最初は事故でした、あの時直ぐに離れていればそれで済んだ話だったのに、まるで紬を逃さないかの様に強く抱きしめてしまったのか菫は自分が信じられませんでした。そんな風に考えていたので紬がまた自分の近くに来たのには気がついていたものの不意に自分の体が宙に浮いたのにはビックリしてしまい変な声が漏れてしまいました。

「ひっへぇぁ！」

驚いた後で周りの状況をよく見てみますと自分は紬に抱っこされている状態で、しかも驚いた拍子に紬の首にしがみついてしまっていましたので、まるでお姫様抱っこされている様な状況になっていました。

「そのままの姿勢でいてくれた方が運び易いから手は離さないでね」

菫が手を離そうとしたのを察したのか、紬が機先を制するかの様にそういいました。そして、菫を軽々と抱き上げたまま寝室まで行き、ベットの上にゆっくりと降ろしてくれました。紬はそこにそのまま座っている様に言うと先ほど貰ってきた薬などを取りに行って戻ってきました。

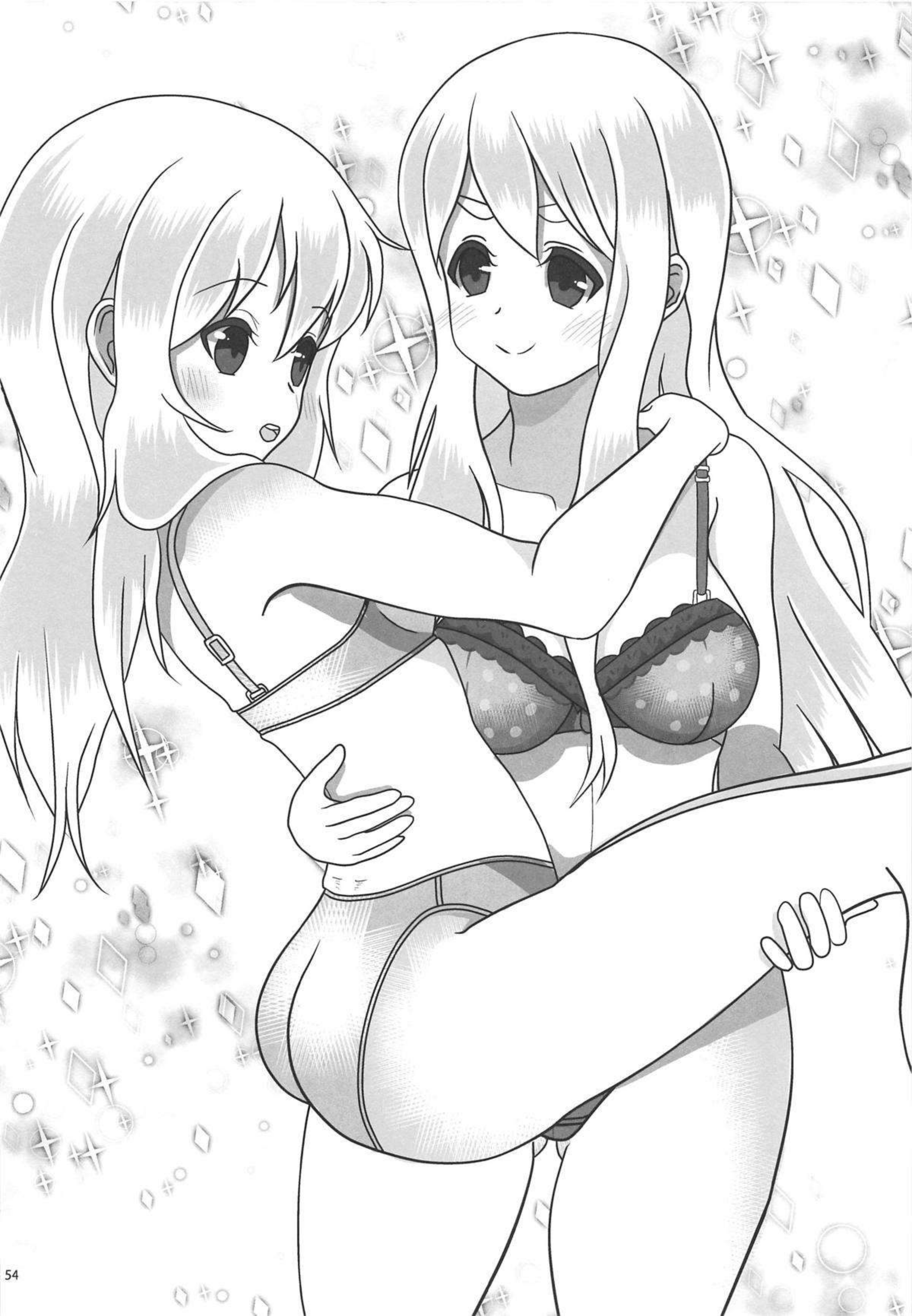
「さっ、左足を出して。これはうちの系列のお医者さまも使っている傷口を保護して治癒の促進をはかる創傷被覆材だそうよ。これを貼って明日まで様子をみて、もしひどくなっている様ならお医者様に行きましょうね」

紬は銀色の袋からシートを取り出すと足の大きさに合わせてカットし、白いメッシュ状になっている面を火傷痕になっている部分に貼り、医療用ネットで足の甲を包みました。

「さっき倒れてしまった時に足首とかはひねらなかった？」

「はい、それは大丈夫。水がクッションになったみたいでどこも痛くないよ」

「そうそれは良かったわ。怪我の事はさっき言ってきたからゆっくり休んでいて大丈夫よ」



「そこまでは大丈夫です。この位の痛みでしたらちゃんとお仕事できます」
「そんな事言ってさっき痛みでちゃんと歩けなかったじゃない」
「あ、あれは慌てたからで……それより、さっきは、ごめんなさい」
「ごめんなさい？」
「あれは、その、事故というか」
「事故？ あんなに強く抱きしめたのに？」
なぜあんな事をしてしまったのか自分でもよく分かっていない菫はそう言われると言葉につまってしまい、思わず顔を横にそむけてしまいました。
「ねぇ、菫こっちを向いて欲しいの。怒っているわけじゃないのよ。でも、これは私たちにとって大事なことよ」
そう言う紬の声は優しく、菫はその声に励まされる様にゆっくりと紬の方に向き直りました。そんな菫の膝の上でギュッと握りしめられていた手の上に紬の手がそっと重ねられました。その手の暖かさが嬉しくて、でもひょっとしたらこの先それを失くしてしまうかもしれないのが怖くて菫は握り返せませんでした。
「私、そのなんというか本当に分からなくって、どうして自分であんな事をしたのか……」
「じゃあ、私をからかったという訳ではないのね」
「そんなんじゃない！ お姉ちゃんをあんな風にからかうだなんてそんな事……」
「それなら、私は嬉しいわ」
「嬉しい？」
何を言われたのかが、一瞬理解できなくって思わず聞き返してしまいました。
「そう、嬉しかったわ。あの時はびっくりしちゃって思わず息をするのも忘れて苦しくなって思わず離してしまったけど、嬉しかったのよ」
「だって、私達女の子同士なのに」
紬は確かに普段から女の子同士が仲良くしているマンガなどが好きでしたが、だからといって現実でも女の子が好きだとは菫は思ってはいませんでした。
「確かにそうだけど、でもあたなとなら嬉しいわ」
「そんなの変だよ！」
「変って言われてもそれが今の正直な気持ちなの」
「お姉ちゃん優しいから、優しいからそんな事を言っているんじゃ……」
「そうじゃないわ。私も最初は戸惑ったけど、やっぱりあの時の気持は嬉しかったのよ。菫、それよりあなたの気持ちはどうだったのかしら。よく考えてみて」
「さっきから考えているけど、あの時はなにか体の中から熱いものがこみ上げて苦しくなっちゃって、気がついたらお姉ちゃんにしがみついていたとしか」
自分でも理解できない衝動に突き動かされて取り返しのつかない事をしてしまった、本当の姉の様に慕っていた筈なのにどうしてあんな事をしてしまったのだろう。この上その姉まで巻き込んではいけないと菫は思っていました。
「そう、分からないものは仕方ないわね、じゃあもう一度試してみましょうか」
それまでは優しく諭すようにゆっくりと喋っていた紬がいい事を思いついたと言わんばかりに胸の前で手をポンと合せ、今までと一転して明るい調子でそう宣言しました。一方菫は今度こそ本当に何を言われたのか分かりませんでした。
「試すって、何を」
「もちろん、２人でキスしてみましょうってことよ」
「え？ えーーーーーーー！」
びっくりする菫の手を今度はガッシと強く掴んで紬は言いました。
「だって、もうそれしか無いじゃない。もう一度キスしてみればさっきのが一時の気の迷いだったのか、そうじゃないのか分かると思わない？」
「そうかもしれないけど、私達女の子同士だよ？」
「さっきの私のファーストキスだったのに……」
「それを言われると辛いです」
「じゃあ、今度は私からキスをする権利が有ると思わない」
紬は冗談めかして言っていましたが、菫は自分の手に重ねられた手が僅かながら震えているのに気がつきました。
（お姉ちゃんだって怖いんだ、それでも確かめようと思ってくれているんだ。私からキスしちゃったのにお姉ちゃんは真剣に考えてくれている。ならば私もそれに応えないと）
「お姉ちゃん、分かったよ。試してみよう」
「うん、じゃあお願いします」

紬はベッドの上で正座状態に姿勢を正すと三指をついて菫にお辞儀しました。その所作は自然で淀みなく、その優雅な佇まいに思わず見惚れてしまった菫でしたが、すぐに気がつき自分も姿勢を正してお辞儀しました。

「こちらこそ、不束者ですがよろしくお願いします」

まるで嫁入りの挨拶の様でした。それが少し可笑しくって２人共顔を上げたあとどちらともなくクスクスと笑ってしまいました。

「でも、この姿勢だとちょっと体近づけにくいわね」

ひとしきり笑ったあと、紬はベットの上で正座で座っていた状態から膝立ちになり菫の方に少し近寄りました。菫も膝立ちになりました。そしてお互いの腰に軽く手を回すと心臓が口から飛び出すんじゃないかという位激しくドキドキしてきました。その緊張が顔にでたのか、紬がちょっと首をかしげてから励ますようにニッコリと微笑んでくれました。その顔ももう１０ｃｍと離れていません。菫は受け入れようと思いそっと目を閉じて、その時を待ちました。紬が更に近づいてくる気配を感じると共に唇より先にその豊満な胸が自分の胸に合わさるのが感じられました。自分の激しい鼓動が紬に伝わってしまうのではないかと心配になって相手の腰に回した手に思わず力が入ります。その瞬間逆に紬の方が腕を引き、菫の腰を自分の方に引き寄せ、ますます体が密着して紬の体の柔らかさと温かさを全身で感じました。

さっきまでこのキスで自分たちの関係はどう変わってしまうのだろうと内心不安でたまらなかったのですが、その温かさを感じるとドキドキはますます激しくなりましたが何故か少し安心出来るような気持ちになりました。そして、紬の吐息を感じたと思った瞬間、柔らかく温かいものが自分の唇に重なりました。

「ん、んーーーー」

固く結ばれた唇同士がぎこちなく重ね合わされただけでしたが、菫は自分の頬が熱いほど上気していくのを感じました。紬の唇は柔らかく、ただ触れ合っているだけなのにとても気持ち良く、それと共に胸のなかになにか熱い気持ちがこみ上がってきました。腰にまわされていた紬の手が何かを求める様に背中で撫で回されました。軽く撫でられただけだったのに電撃の様な衝撃が体を走って、体中から力が抜けてしまいそうになりましたが、紬の腕に支えられてなんとか姿勢を保ちました。

「ん、あっ」

閉じた唇の間からは思わず切ない吐息が漏れてしまいます。

（私、お姉ちゃんとキスしちゃっているんだ、でもどうして、どうして唇を重ねているだけでこんなに気持ちがいいんだろう……）

呆けそうになる頭で感じていたのは、恐ろしい程の気持ち良さとそんな疑問でした。しかし、そんな気持ちの良い時間もやがて終わりが来ます。重ね合わされていた紬の唇がゆっくりと離れていきます。それと共に感じたのは大きな喪失感でした。まるでそこから紬が居なくなってしまった様な喪失感を感じて、今まで閉じたままだった目を開き、目の前に紬が居る事を確認しました。紬の頬は真っ赤に上気し目は少しトロンとした表情で今まで見たことがない程艶めかしく感じました。でもきっと自分も同じような顔をしているんだ、いやひょっとしたらもっと惚けた顔をしているかもしれないと思いましたが不思議と紬の前なら恥ずかしくないとも思いました。

２人はそのまま熱い吐息を吐き出しながら暫く見つめ合っていました。そして、２人とも確かに目の前の存在が特別だという思いを抱いていました。

「キスって凄いのね、私くらくらしちゃった。」

「私なんだか、体の力が抜けそうになってしまって、なんでだろう女の子同士なのに、お姉ちゃんとなのにとっても気持ちよくって、もう一度キスすればなにか分かると思ったけどそんな事ばかり感じてしまって……」

「私もよ。でもそれが好きってことじゃないかしら。少なくても嫌いな相手とキスしても嫌悪感しか感じないと思うの。好きな相手とキスしているから嬉しい気持ちが沸き上がってきて、それが気持ちよく感じるのではないかしら」

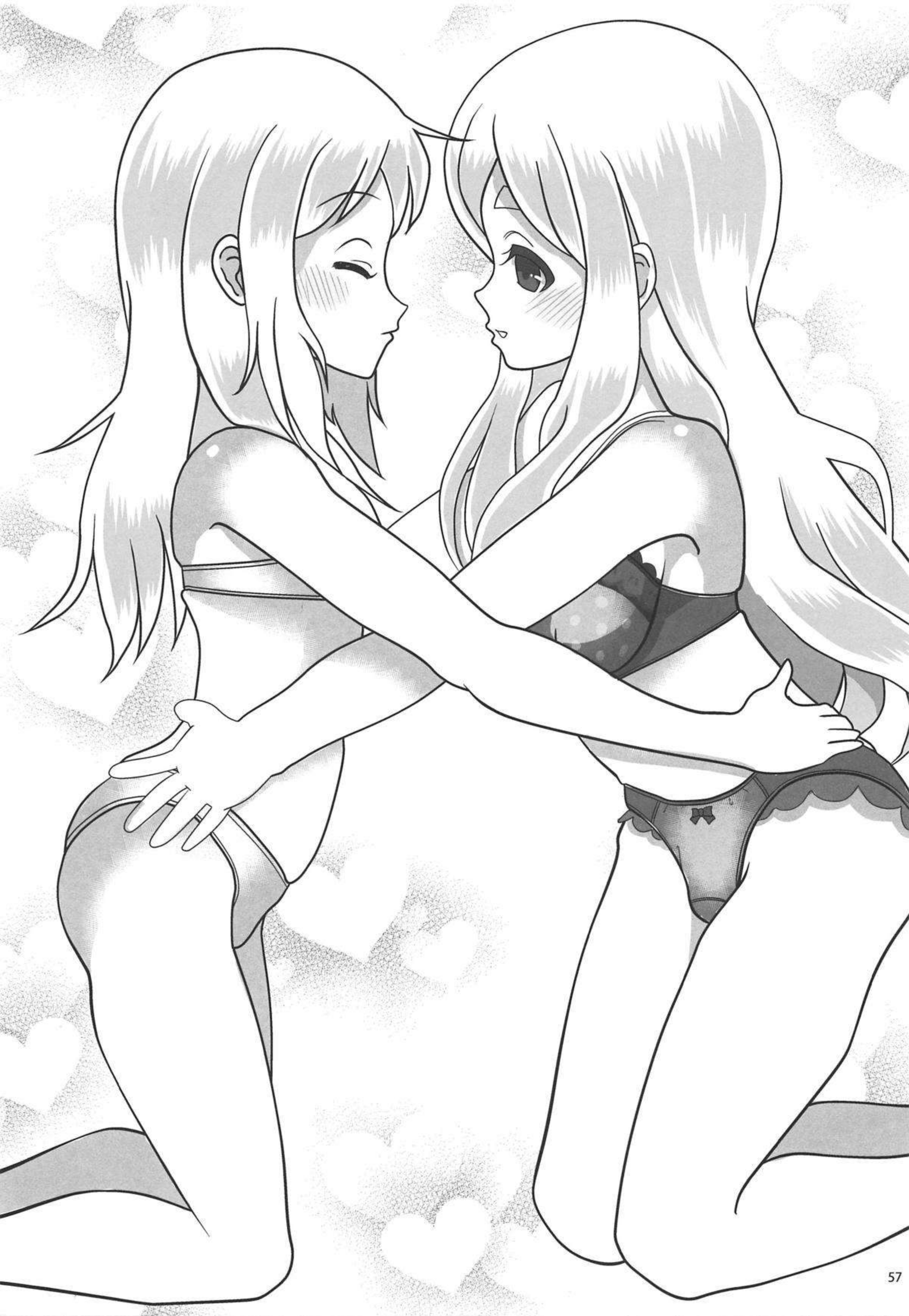
確かにキスしている間に菫が感じた気持ちは温かく、そして唇が離れた時に感じたのは寂しいという気持ちだったと思います。それでも今日まで姉の様に慕っていると思っていた気持ちが恋だったかもという事が菫は飲み込めませんでした。

「お姉ちゃんの事好きだけど、お姉ちゃんはやっぱりお姉ちゃんだし、それに私たちはやっぱり女の子同士だし……」

「それがいけない事なのかしら？」

「え？」

「私も男の子の事を好きになった事がないからあまり偉そうな事は言えないのだけど、人が誰かを好きになってその人のいろんな面を見るってことで、そうすると当然意



見が合わない部分や嫌な部分も知ることになると思うの。それでもそれを超えて好きでいられるというのは凄い事なんじゃないかしら。そんな相手に出会えるなんて奇跡的な事じゃないかしら。そんな素敵な出会いが同性同士で起こったという事自体が罪だなんてそんな事はないと思うの」

「でも、でも」

「さっき、キスしたときに私思ったの。もしも明日私の命が尽きるとしたらその時はあたなに傍にいて欲しいって。お父様よりお母様よりあなたが傍にいる事が嬉しいって。菫はどうかしら」

「そんな事を急に言われも」

そうは言ったものの、どうかしらと言われたとき、瞬間的に紬に傍にいて欲しいと菫は思っしまいました。でも、そんな自分がおかしいのではないかという気持ちもまだ捨てきる事ができませんでした。

「もう1度キス、しましょ？」

紬は菫の唇に手を伸ばし指で軽くそこをなぞりました。たったそれだけの事なのに背筋が震える程気持ちよく菫は自分の体がどうかしてしまったのではないかと思いました。

「やっぱり、好きな気持に罪なんて無いと思うのよ。私は」

そう呟く紬の声が今日は耳朶をくすぐる様に響き、菫は自分でも意識しないままうなずいていました。それを確認すると紬の唇が再び近づいてきて彼女のそれと重なります。2人とも自分たちを突き動かすものが何なのかの答えをそこに求める様にお互いの体を合わせ、その暖かさと柔らかさを感じ合い、それを歓びに転化していきました。

(柔らかい、お姉ちゃんの唇ってなんて柔らかいの。このままずっとこうしていたいとか思ってしまうのはどうしてなんだろう)

この瞬間をずっとこのままにしたいという思いから、無意識により強く紬を抱きしめてしまいます。紬のほうもそれに応えてより強く抱きしめてくれました。紬の綺麗な曲線を描く乳房と膨らみ始めの菫の乳房も重なり合い、お互いを押しつぶし合いそこからお互いの高まった鼓動が伝わってくる様な気がしました。重なり合った唇からは頭が痺れる様な強い何かが湧き上ってきます。そして、それはとても幸せな気持ちにさせてくれました。

(こんなに幸せな気持ちが湧いてくるなんて、私やっぱりお姉ちゃんの事が好きなんだ。そして、それをお姉ちゃんが受け入れてくれるのが嬉しいんだ)

「ああ、菫可愛いわ。菫大好きよ」

「私も、私もお姉ちゃんが大好き！」

紬がいったん口を話して愛をささやくと菫もそれに応えました。2人とも興奮に頬は紅潮し、目は幸せにとろんと蕩けて、唇からは熱い吐息が漏れていました。その扇情的な光景のなか、紬の艶々と濡れ光るピンクの唇に目を奪われた菫はおもわずそれをペロリと舐めてしまいました。

「あんっ」

可愛い声が紬から漏れるとともに舌が唇の間から顔を出し、菫の舌と微かに触れ合いました。僅かな触れ合いでしたがそれは痺れる様な衝撃を2人にもたらしました。紬は思わず菫に覆いかぶさる様に強く抱きしめてましたが、菫はそれを支えきれず2人ともベットに倒れてしまいました。でも、そんな事にはお構いなく2人はお互いを求め丸く柔らかな唇をこすり付け、子猫の様なピンクの舌先をお互い躍らせる様に絡めあっていました。

(す、凄い。これが大人のキスなの？ 大人のキス凄い！)

元々舌先や唇は指と並んで人の触圧覚が鋭敏な部分です。それが興奮によりさらに鋭敏になり2人はそこから押し寄せる今迄体験したことがない感覚に頭を真っ白に焼かれそうになり、その快楽にただ溺れるばかりでした。体はそれに自然と反応し互いの体をもっと強く引き合い、胸と胸を強くこすり合わせます。紬の豊満ながらも若い弾力のある乳房はまるでゴムマリの様にうねうねと歪んでは元の形に戻ろうとしていて、そこだけ別の生き物の様にも見えました。菫の膨らみ始めたばかりの鋭敏過ぎる胸は痛みとしてそれを伝えますが、その痛みよりも今は唇や舌からの刺激の方が強くあまり気になりませんでした。しかし、菫自身も気がついてはいませんでしたが、痛みだけではない疼きを同時に感じていたのです。

一方でお互いを支え合う必要がなくなった手は2人ともその長く綺麗な髪を愛おしむ様に撫でていましたが、やがてお互いの手と手を繋がりあいを確認する様にしっかりと握りしめました。

「はぁはぁ、お姉ちゃん、キス気持ちいい、なんでこんなに気持ちいいの」
「んん、私もよ、私も菫とのキスが気持ちいいの！」
切ない吐息とともに吐き出される言葉にますます高ぶりながらお互いを貪るように唇と唇をこすり合い、少しでも接触を深める様に舌と舌を絡め合いながら2人はディープなキスを続けます。もう熱い吐息もお互いの唾液も2人には甘露にしか感じません。くちゅちゅぷぴちゃと甘い水音をたてながら激しいキスは続き、2人とも湧いて出る快楽に歓びながらしがみついた身体を互いに身悶えらせていました。
その時、偶然にも菫の脚が紬の股間に滑り込んでしまい、紬の敏感な部分を刺激してしまいました。既に極限近くまで昂ぶっていた紬の身体はそれだけで頭の芯まで蕩ける様な快感を生み出しました。
「ああ、菫ちゃんそこ、そこダメなの。もう私イッちゃう、イッちゃう」
「え？お姉ちゃんなにがダメなの？　何がイクの？」
「あっあん、イク、イク、イッちゃうぅぅぅぅ！」
何がおきたか分からない菫が困惑するなか、紬の体は小さくビクビクッっと痙攣したかと思うとふっと力が抜けてそれまで覆いかぶさっていた菫の身体の上から転がる様に外れてベッドの上に仰向けに寝てしまいました。その顔は幸せそうに微笑んでいるもの目の焦点はまだ合っていない様でした。一方菫の方は紬の突然の変化に心配になってしまいました。
「お姉ちゃん、どうしたの！大丈夫？」
「大丈夫よ～ふふふふ、私、菫ちゃんにイカされちゃった～」
「そのイクってか、イカされるかって何です？」
「とっても気持ち良いことよ。菫ちゃんもそのうち分かるわ。でもちょっとだけ休ませて～」

＊　＊　＊

まだ何が起きたのか納得はいかなかったものの、とりあえず大丈夫そうなので菫は紬が回復するまで待つことにしました。仰向けに寝ている紬の寝姿は既に汗まみれになっているせいもあってとても色っぽく、自分もいつかこんなに素敵な女性らしい身体に成れるのだろうかと思いました。特に寝ていてもあまり型崩れしていない胸の上の双丘が呼吸とともに浅く上下しているのは思わず目が釘付けにされてしまいそうでした。それに比べると自分の胸は少しは膨らんできたものの、まだ全然丸みもなく触っても全然柔らかくないのです。それに比べるとさっきまで胸を合わせていたお姉ちゃんのものはとても柔らかい感触でした。
「お、お姉ちゃん！　あの、その、なんてゆうかとても言い難いんだけど……」
「なぁに？何でも言ってみて」
「お姉ちゃんの胸を、あの、その、えっと、触らせてもらっても、いい？」
自分でも何を言ってるんだろうとも思いつつ、好奇心には勝てず菫はお願いしてみました。紬は最初きょとんとした顔をしたものの、直ぐにニコニコしながら了解してくれました。
「いいわよ～、ちょっと待っててね」
紬は上半身を起こして、ブラのフロントホックを外しました。そうした瞬間、まさにプルンという音がしそうな感じで円やかな曲線を描く双丘がブラジャーの中から飛び出しました。
「はい、どうぞ」
そう言って自分のおっぱいを下から支えるように持ち上げて菫の方に微笑みながら差し出しました。
（自分から言い出したものの、何なのこのシチュエーション！うーなんか緊張するぅ）
目の前に差し出されたおっぱいを前に菫は思わず生唾を飲んでしまいます。
「では、お姉ちゃん失礼します！」
菫は思わず正座して姿勢を正してから手を伸ばしましたが、その動きはひどくぎこちないものでした。
「最初は優しくね」
緊張でちょっとガチガチになった菫を見て、紬はその手を取って自分の胸に誘導します。菫も誘導されて恐る恐るといった感じで紬の胸にタッチしました。先ほどブラジャー越しにではありますが胸と胸を合せてその柔らかさや大きさを感じてはいたものの、実際にこうして手で触れてみるとひときわ実感できました。そして、手のひらで円をかくように撫で回してみるとそ動きにあわせてくにゅぷにゅと形が変わるのは感

動的ですらありました。
「柔らかい……それに綺麗」
「もっと強く揉んでも大丈夫よ」
「じゃあ、遠慮無く……」
手のひらには余るほどの大きさの乳房の下から持ち上げる様なかたちになった菫は少しずつ力を加えて行くと指が何処までもめり込んで行くような錯覚を感じる程容易に肉に食い込んでいきました。その感触が凄すぎて何度も繰り返してしまいます。
(これがパフパフってやつなの？ なんで男の人がそんな事したがるのか分からなかったけど、これは何度もしたくなるかも)
「うっ、あっ、はぁ、はぁ」
最初は揉むのに夢中になり過ぎて気がついていませんでしたが、いつの間にか紬が切なそうな吐息を漏らしていました。
「お姉ちゃん、大丈夫？ 強すぎちゃった？」
「大丈夫よ。何故か菫に触られると凄い感じちゃうだけなの。見て、私の乳首恥ずかしいくらい固くなってしまっているわ」
それまで夢中で揉んでいたので気がついていませんでしたが、確かに乳房の頂点に佇む輝くようなピンクの蕾は固く起立していました。
「これ、痛くない？ 大丈夫なの？」
自分の乳首もそうなった事はあったものの、まだ成長途中の菫のそれは布が擦れても痛くなる事があるため思わず聞いてしまいました。
「大丈夫よ～ 摘んでみてちょうだい」
そう言われたのでそっと摘んでみるまるでグミをのような柔らかくそれでいて弾力のある感触でした。
「プニプニしてる。なんかいつまでも触っていたくなる感触」
菫があまりの感触の良さに感激して両の乳首をプニプニと弄ったり掌で転がしたりしていると、紬の吐息がますます荒くなってきました。
「菫、凄いの、私凄い感じちゃうの。こんなの初めて」
あまりに感じてしまった紬は思わず菫の頭を胸に抱え込んでしまいました。突然頭を押さえ込まれた菫の方はあっと驚いて開いた口にちょうど尖った乳首が飛び込んでくる形になってしまい口を塞がれてしまいました。
「ん、んんー！ん！ん！」
頭を押さえられた菫は抗議の言葉を発しようとするものの声にならず、その度に動かした舌が紬の乳首を刺激してしまい、それに感じた紬はますます頭を押さえ込むという悪循環の成立です。暫くしてそれに気がついた菫が動きを止めると、ようやく紬は頭を離してくれました。
「お姉ちゃん、酷いよ～」
「ごめんなさい。私ったら感じすぎちゃって我を失ってしまったわ」
「そんなにおっぱいって感じる様になるんだね」
「今日は特別よ～ でも菫も試してみない？ さっきみたいに痛くはしない様にするから」
「え、ど、どうしようかなぁ」
さっき触られて痛かった事もありますが、自分のあまり大きくなく形も悪いそれを改めて見られるのは正直恥ずかしかったのです。
「菫の可愛いおっぱいを私にも見せて欲しいなぁ」
「可愛い？ そうかなぁ」
「可愛いわよ。でも菫の可愛いおっぱいも直ぐに成長しちゃうの。そうなる前に菫の秘密の宝石をちゃんと記憶しておきたいのよ」
秘密の宝石とか大袈裟なとは思いながらも紬にそうまで言われると断り難く菫はコクっと頷くと自分のブラジャーを外し始めました。流石にちょっと緊張しているのか、いつもより少し外すのに手間取ったあとブラがはらりと落ちました。露わになった乳房は膨らみ始めたばかりでまだ脂肪はついていないため、大人の乳房の様に丸みは帯びておらず乳首を頂点としたシャープな円錐型でした。元々あまり脂肪がついてもいない体型なため薄く平たい胸にできた2つの丘といった風情です。一足早く丸みを帯び始めた腰回りとのこの年代の少女特有のアンバランスさは二次性徴を迎えたばかりの少女にしかない可愛さも有していました。
「可愛い、可愛いわ！菫。ディ モールト カリーナよ！」
「なんで突然イタリア語なの？ でもありがとうございます……」

そんなやり取りをしつつも紬はそっと優しく菫の胸に手を置きました。そして、ゆっくり軽く撫でる様に丸く手を動かし始めました。紬の手の平や指は凄く柔かくってゴツゴツしたところを全く感じず、それに温かさも心地よく感じました。最初はくすぐったさしか感じなかった菫でしたが、丹念にほぐされているうちになんだか胸が熱くなった様な感覚にとらわれ、段々と体の芯が疼いてくる様な気がしてきました。

「菫のお肌って本当に白くって綺麗よね。私も白い方だけど菫に比べると全然だわ」

「ゲルマン民族の血が濃いですから」

「いつか2人でドイツやオーストラリアにも行ってみたいわね。そうそう、この間ドイツの地図見ていたらリューネンって面白い都市の名前見つけちゃったのよ」

「なんか不吉な名前ですね。向こうの言葉だとどんな意味なんでしょう」

「そこまでは調べなかったわ。ゲルマン人とか欧米の人のおっぱいってアジア人より乳腺というお乳を作る組織が発達しているんですって。だからアジア人の方がおっぱいは柔らかいそうなんだけど、その変わり寝たり年をとっても形が崩れにくいそうよ」

「そんな違いがあるんですか私はそちらの血が濃く出ているんでしょうか」

「そうかもしれないわね。それにしても菫って白いだけでなくすっごくスベスベで撫でてるだけでも幸せな気分なの」

「それは良いんですが、いつまで続けるんでしょうか」

「もうちょっと触らせてほしいわ〜 でも菫も顔が上気してきたし満更でもないんじゃない。それに見て、可愛いお山の頂上も触って欲しそうにしてるわ」

そう言われて自分の胸を見下ろすと、先ほどの紬と負けないくらい菫の乳首も固くなっていましたし、先ほどからの疼きもどうやらそこを中心に発生している様です。いつもは擦ったりするととても痛いそこを触られるのはとても怖い気もしましたが、同時にさきほどの紬の乱れ様を思い出すとどうなってしまうのか興味も掻き立てられました。その葛藤と乳首が立ってしまった恥ずかしさとで紬の顔をまともに見れないまま菫はお願いしました。

「や、優しくお願いします」

「もちろん、じゃあまずは優しくキスしてあげるね」

紬の顔が菫の乳房に近づくと吐息が凄く感じられて、もうそれだけで感覚が凄く敏感になっているが分かり、期待と不安が同時に膨らみドキドキが痛いくらいに高まりました。紬の唾液に濡れた唇がなにかとても淫猥なものに感じられ、それが自分の乳首に触れたときそこから全身を貫く様な衝撃が走り、思わず口から変な嬌声が漏れました。

「きゅふあっ！」

なんか自分の声じゃ無いような気がしました。紬はその声を聞くと少し微笑み菫が痛くないように舌の上に唾液を貯めるとそれをピンクの蕾にそっと塗りつけて、その上で唇で挟んでゆっくりと擦り上げましするとそこからヒリヒリとした鈍い痛みとともに、ジンジン響き乳房の芯が熱くなってしまう様な不思議な感覚も湧き上がってきました。ちゅぱちゅぱっと怪しい水音を立てて乳首を吸い上げる一方でもう片方の乳房を引き続き優しく揉みほぐされて口からは自然と甘い声が漏れてしまいます。

「んふぉ、お姉ちゃん、私、私変なの。痛いけど気持ち良いの、ああ、あん」

「それが感じるってことなのよ。私が菫を愛いしてそれで心も体も気持ち良くなるってことなの。素敵でしょ」

「はぁはぁ、これが感じる……私もお姉ちゃん大好きだよ。ん、くふぅ」

「自慰でも気持ち良くなることはできるけど、心も気持ちなるのは好きな人と温め合うときだけだと思うの。私もあなたが歓んでくれて嬉しいのよ」

「お姉ちゃんも嬉しいの？ん、そこいいの」

「お父様やお母様が喜ぶ事をして差し上げたいと思うでしょ？ それと同じよ」

「そうか、そうだね。ふぅふぅ、それなら分かるよ。ふぅぅぅん。ところで、おねえちゃん自慰ってなに？」

「え？ ……ああそうね。私もあなたの年頃にお友達に教えて頂いたんだったわ。それについてはまた後で、ね」

紬はお喋りしながらも手は休まず菫の可愛い膨らみを愛し続けています。左右交互に口に咥えていたので、桃色の先端は唾液で怪しく輝いていて菫の目からみてもエッチな光景に見えました。それに弄られているのはおっぱいなのに、先ほどから不思議と下半身がキュンキュンと疼き股間がぬるぬるとし始めていました。

紬が今度は乳房先端の蕾を舌でペロペロと舐め始めると舌の少しザラッとした感触が唇のプニっとした感触とはまた違った刺激を送ってきて菫は思わず身悶えてしまいます。

「あっ、あん、うっうん、おっぱいが、おっぱいが熱いの。私おかしくなってしまいそう。はぁん」

初めて他人のおっぱいを弄っている紬の愛撫が特別に上手い訳ではありませんでしたが、時間をかけて丁寧にほぐした事と初めての交わりに昂ぶったお互いの気持ちが異常なほどの快感を引き出していました。菫の白い肌は桜色に染まり、全身から玉のような汗が吹き出し始めていました。菫は次々に送られてくる刺激の前に頭が真っ白に焼けてしまいそうになっていました。そして、股間のぬるぬるはますます酷くなり、脚の間が疼いてしかたなく内股を擦り合わせてみても全く収まりませんでした。

「はぁはぁ、ん！ んんん！ あっあぁん！ お姉ちゃん、下のほうが切なくってキュンキュンしてるの。はぁあっあっあっぁ！ それにお漏らししした訳でもないのにビシャビシャで私の体おかしくなっちゃったの？」

「大丈夫おかしくなんてないの。女の子は愛されて、その人の全てを受け入れる準備ができるとそうなってしまうのよ。」

「ん、あああああ……受け入れるって何を、どこで？」

「切なくってキュンキュンしている、あなたの女の子の部分でよ。私が慰めてあげる、いい？」

「ちょっと怖いけど、お姉ちゃんならいいよ。あっ、ああう！」

「そう、ありがとう。お姉ちゃん、いっぱい頑張るからね」

紬は乳房をほぐしていた手を菫の内股に伸ばしました。そこは女の子に部分から溢れた恥ずかしい体液でもうぐっしょりと濡れていました。それを指で拭って十分に濡らしてからパンティの中にするりと手を入れて大事な部分に指を伸ばします。その部分は熱くもう受け入れ準備は十分といった感じでしたが、紬も不慣れなので自分と微妙に位置が違っていたりする人のそれは手探りだけでは意外に何処が何なのか分かりませんでした。

「悪いのだけど、そのベッドの端に座りなおして欲しいの」

「う？ うん」

そう言って菫をベッドの端に座れせると、自分はベッドから降りて菫の前で屈み込みました。そして、菫に腰を上げてもらってそのショーツを器用に脱がせました。

「は、恥ずかしいよお姉ちゃん」

ショーツを取られて自分の股間を覗きこまれた菫は元々上気してたところに羞恥が加わり更に真っ赤になっていました。

「ごめんなさい。意外に分かりにくくて。でもあなたのここ、とても綺麗よ」

菫のそこはまだ発達途上ということもあって小陰唇が小さくほとんど隠れており、縦の筋目が綺麗に真っ直ぐ延びていました。ぷっくりと膨らんだ可愛い土手に指をそえてそっとそこを開くと露に濡れた花の様に可憐な薄いピンクの肉の花びらが開きました。それは菫の真っ白な肌とのコントラストも美しく紬は愛おしいとさえ思いました。花の蜜もたっぷりと潤っており、これから起きることに期待をするように、もしくは紬を誘うようにピクピクと小さく震えていました。その可憐さに最初は指で慰めるつもりだった紬でしたが指で触るのがいけないようなデリケートさを感じて、自然と舌を伸ばしていました。くちゅりと小さな水音がしてそこは紬を迎い入れました。舌が触った瞬間菫の太ももがビクッと震えました。

「嫌、お姉ちゃんそんなとこ舐めちゃ汚いよ」

「大丈夫よ〜 さっきも言ったけどとっても綺麗よ。あなたの血筋だと年をとってもこのまま綺麗なままなのでしょうね。羨ましいわ」

「そうなの？」

「メラニン色素が多いか少ないかの違いなのよ。日本人でもあまり日焼けしない人はそれ程黒ずまないそうよ。逆に直ぐに日焼けして黒くなってしまう人は危ないそうよ。もちろんそれだけではなくて個人差はあるけど」

「なるほど。あっでも、そういう話じゃなくって！」

「さっきお風呂に入ったばかりだし十分綺麗よ。それに菫のだったら私全然平気よ」

「お姉ちゃんが気にしなくても、私気になります」

「そんなに聞き分けのない娘はこうよ！」

そう言ったが早いか紬は目の前にあった既に皮から顔を出している赤いつやつやの実をパクリと口に含みました。一番敏感な部分に突然刺激を受けた菫は大きな声で叫んでしまいます。

「あっ、あああ、お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

自慰もしらない菫にこれはちょっと早過ぎたかしらと思いながらも抗議を止めさせ

る事には成功したので紬は強くし過ぎない様に気をつけながらも豆の様な突起をチロチロと舐め続けました。

「ひっ、あっ、いや……」

紬が一舐めする毎に菫の太ももがビクビクと振るえ、何かに耐える様に自分の指を噛みながら、その身を悶え乱れさせています。

「菫ってば敏感で可愛いわ」

紬に刺激されてより大きくしこった突起はまるで何かのスイッチの様に舌が触る毎にお尻まで浮き上がりそうな反応を菫に引き起こしました。与えられ続ける刺激に女の子自身からは恥ずかしい蜜がトロトロと止めどもなく溢れてきます。

「おっお姉ちゃん、わたし、わたし……」

激しい菫の反応にそろそろかなと思った紬は口を突起から離し、その下の陰唇とキスを交わし、舌をあまり奥まで差し込み過ぎないように慎重にその中に入れて行きました。

「そ、そんなところを舐めちゃだめ、だめなの！」

「ん、ぴちゃ、菫のここ舐めきれないくらい溢れ出しているの。少ししょっぱいけど」

菫の反応の良さに紬も高揚して少しはしたない音を立てながら一心に舐め続け、唇は女の子の溝を擦り上げます。

「ん、ああ、ふぅぅん。おかしくなっちゃいそうです」

最初は紬の顔がギリギリ入る位しか開いていなかった脚も力が抜けてしまい、まるで全て受け入れるかの如く大きく開いてしまいました。そのせいで幼さも残したお腹から内腿にかけてのラインも恥ずかしげもなく晒してしまっています。紬は舌を小刻みに動かしながら、緩んだ脚の間から腕を入れて今度は手の平で軽く肉の芽を撫で上げ始めました。女の子の敏感なところ２ヶ所を同時に責め始められた菫は股間から上がってくる脳髄を蕩かすような刺激にもう我を失くす寸前でした。

「あああああああああ、お姉ちゃん、お姉ちゃん。なにかが、なにかこみ上げて来そうなの、これなんなんの、んん、もうどうにかなってしまいそうで怖い！」

「それが、女の子のイクって感覚よ、大丈夫とっても気持ちのいいことだから怖がらず受け入れて」

そう言うと紬は同時に責めている２ヶ所の動きを少し激しくしました。ぴちゃくちゅという水音が部屋に響き、全身が真っ赤に染まった菫は激しく息を吐きながら身体を右に左に悶えさせ、そのまだ固い蕾の乳房も頂点を固く尖らせています。そして、遂に一際激しく大腿部が震えました。

「これが、イクってことなの？ あっ、あああ、あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

足指の先まで菫の身体全体が激しく震え、末端に力が入ったかの様に手や足の指が閉じられ、ピクピクと少し痙攣したあと、菫は脱力しました。紬は脱力した菫を優しく抱きとめました。

＊　＊　＊

「わたし、いちゃったの？ お姉ちゃん」

「そうよ、とっても気持ち良かったでしょ？」

「はぁはぁ、頭の中が焼けたと思った……」

「凄かったわ。ほら、慰めていた方の私の方もびちゃびちゃになっちゃった」

「お姉ちゃん……そんな状態で切なくない？」

「ちょっと切ないわ。あなたを休ませたら自分で慰めようかしら」

「そんなの、そんなのダメ！ 私が今度は、今度は私がお姉ちゃんを慰めてあげる！」

「菫……だってあなたまだ初めていったばかりで大丈夫なの？ 無理していない？」

「全然大丈夫、私にしてくれた事を私もお姉ちゃんにしてあげたいの」

「私今凄いキュンキュンしちゃっているわ」

紬はギュと菫を抱しめると上からキスの雨を降らせました。腕の中の菫の細く華奢な身体をとても愛おしく感じました。２人ともお互いの愛しさを確認するように激しいキスを交わしたあと、紬は自分のパンティを降ろそうとしましたが、それは菫に止められてしまいました。

「だめ、今度は私がお姉ちゃんのを脱がしてあげるの」

下から上目遣いでちょっと拗ねた様に言う菫の可愛さには紬も抗う事はできずに、脱がしてもらう事となりました。

「なんだか、恥ずかしいね」

「私なんか訳も分からないまま脱がされたんだよ」

「……ごめんなさい」
「とっても恥ずかしかったけど、でもなんかお姉ちゃんがより身近にも感じられたよ」
そう話しながら菫は濡れそぼって伸縮性が落ちた下着を広げながら下げました。目の前に露わになった紬のそれは、菫のものに比べると大陰唇にも厚みがあり、プクッと膨らんでいて見るからに柔らかそうでした。そして、自らびちゃびちゃと言うだけあって、そこから溢れた愛液が内股まで濡らしてしまっていました。菫のものより成長した隠された唇はそのピンク色の閉じ口を肌の間から少し覗かせていました。菫は花に誘われたハチの様にそのピンクの花弁に引き寄せられ恐る恐る甘酸っぱい匂いのするそこに口をつけ、滴る蜜をペロペロと舐め取りました。
「ん。菫……」
「お姉ちゃん、気持ちいい？」
「ええ、とっても上手いわ。人にされるってこんな感じなのね。自分の指で慰めるとの全然違うの」
菫も初めてなので、どこをどうしたら良いのかまるで分かりませんでしたが、稚拙ながらもお姉ちゃんに感じて貰いたいという気持ちで懸命に奉仕しました。筋目に舌を差し込み入れたり出したりするとそこはまるで意思があるかのように舌に絡みついてきて、恥裂からはよりいっそう蜜が溢れてきます。菫の舌が触れた瞬間紬のそこから頭まで甘美で激しい快感が駆け上りました。
「あ、あっ、いい、いいわ。もう少しもう少し上を」
そう導かれるまま少しだけ上に舌を動かすと少し出っ張った突起がありました。既に十分大きくなっていたそれを菫は先程自分がして貰った様に唇で咥えました。その瞬間紬の太腿がビクンとひきつき足が強張りました。
「お姉ちゃん、ここが感じるのね」
「そうよ。女の子の一番敏感な部分だから優しくね」
目の前のピンクの豆にキスの嵐を降らせると、触れる度に紬の口から甘い吐息が漏れて、体を切なそうに捩ります。捩られた体に逃げられまいと太腿に回した腕に力を入れて押さえつけながらもそんな敏感な反応を返してくる紬がいつにも増して可愛く感じられ、菫の胸も温かくなりました。
「あぁぁっ、菫、菫！ 私、持ち良すぎてどうにかなりそう」
紬の反応に気を良くした菫は更に強い刺激を送り込もうと舌を小刻みに動かしてピンクの肉芽を刺激する一方で、片方の手を豊かな乳房に伸ばしました。つきたてのお餅の様に柔らかく弾力に富んだおっぱいは菫の手の中でフニュリと潰れては押し戻してきます。手のひらから溢れそうなその大きなマシュマロを優しく丹念に揉みしだきました。揉んでいるうちに頂点の蕾が反応し固くなり、手のひらにはそのコリコリとした感触も伝わってきます。菫は揉み続けながらも手を円を描くように動かして手の平でピンクの突起を可愛がりました。
「おっぱいも、おっぱいもいいわ、菫ったらすごい」
そうして紬を愛撫していた菫でしたが、紬の甘い嬌声などに刺激されて段々と自分の股間が疼き始めてきてしまい股をこすりあわせたりしていたところを紬に見つかってしまいました。
「菫も切なくなっちゃったのね。私、あなたと一緒にいきたいわ」
「一緒に？」
「そう一緒によ。ちょっとここに足を広げて座って欲しいの」
そう言われた菫は少し位置を変えて紬の前に足を広げた状態で座りました。しかし、ショーツも履かない状態で改めてそうやって座るのはやはり恥ずかしく、上気していた頬が益々熱くなるのが感じられました。紬はそんな菫の前にきて腰を落とすと菫の右足を軽々と持ち上げて肩で支えるように担ぎました。そして、開いた股の間に自分の股を滑り込ませて自分のあそこと、菫のあそこをぴたっと密着させました。
「私の女の子と菫の女の子がキスしちゃったわ。あなたの温かさを感じるの」
「あ、あああ……」
股を強引に広げられたはしたない格好が恥ずかしく、また自分のそこと紬のそこがくっついてしまっている事が俄には信じられず菫は言葉がでませんでした。しかし、そこからは紬の粘膜に包み込まれるような温かさが伝わってきて、それだけで蕩けてしまいそうな感慨がふつふつと込み上げてきました。
（なんてこと！ 私、今お姉ちゃんと一つになっているんだ。私とおねえちゃんの恥ずかしいところがくっついちゃっているんだ！）
「動くわよ？」
そう言ったものの紬にもここからどう動いたら良いのかなんて分かってはいません

でした。しかし、より深く菫と一つになりたい、愛しい人と一緒にイキたいという思いで腰を動かし始めました。お互いに濡れきったそこはピチュクチュと怪しい水音を立てながらも意外なほどスムーズに動き始めました。

「何これ！ わたし……んんん……くふぅ」

「お姉ちゃん、凄いお姉ちゃんを感じるよ、あぁぁぁぁぁ」

もう十分興奮状態にあった粘膜と粘膜が密着状態でこすれ合って文字通りあそこ全体から快感が衝撃となって駆け上がってきて２人を襲いました。

「ふぁぁぁぁ、はぁはぁ、あっ……あっぁふん」

「ん……あ！ あ！ はぁっ……んんん」

背筋をざわつかせる快楽の波に飲み込まれて２人共言葉を失い口からは嬌声が漏れるのみでした。あまりの快感に菫は少し逃げるように腰を動かしましたが、それが元で今度は一番敏感な突起同士がこすれ合う姿勢となってしまい、更なる衝撃が２人が襲いました。

「ひ、ひぃぃ～ 当たってる、すみれのクリトリスが私のとクリトリスと当たってるぅぅぅぅ！」

「あああぁぁ……と、溶けちゃいそう！ これ、怖い、凄すぎて怖い！ 私達どうなっちゃうのお姉ちゃん！」

「ふぅ、はぁはぁ。大丈夫、私も一緒、私達繋がって一つになっているのよ。ん、くぅぅぅ。一緒にイキましょう」

２人の歓喜が高まると共に恥ずかしい分泌物がこれ以上ないというくらいあふれ、ぐちゅ、じゅぶ、ぴちゃと粘着質でいやらしい音を立てます。固くしこったクリトリス同士がこりこりと擦れあい、その度に電気ショックが体に走り二人共体の震えが止まりませんでした。

「あぷ……ふ……はぁっ、おねえちゃん、私またなんだか変だよ。体の奥がウズウズしているの」

あまりの快感に息も絶え絶えになりながら菫は自分の体の変調を訴えました。

「くっ、ぅぅぅ。菫、イキそうなのね。ふぁぁぁぁ」

「私、またイクのイッちゃうの？、あぁぁぁぁぁぁ」

「いっしょに、いっしょにイキましょう」

紬の腰がここぞとばかりに一層激しく動き始めました。粘膜と粘膜が重なって一つに混ざり合って溶けていく様な気がしました。送られてくる電気ショックの様な快楽信号はますますその間隔を縮めて頭の中を快感で埋め尽くして行きます。

「すみれ、すみれ、大好きよ！」

「私も、大好きだよお姉ちゃん！ 好き！ 好きなの！」

そして、ついに頭のなかで大きな爆発が起こり２人の視界を白く染めて行きました。そのまま菫は意識を失ってしまい、紬も最後の力を振り絞って菫の横に移動すると、その手を握り意識は深い眠りへと落ちていきました。

* * *

紬が目覚めるとそこは知らない天井でした。そして、確かに繋いだままだった筈の手の中には何も有りませんでした。

「あれ？ 菫お仕事しに行っちゃったのかしら」

そのとき、コンコンとノックする音と共に聞き慣れた声がしてきました。

「ムギー？ 起きてるか？」

その声で紬は現在自分が置かれている状況をはっ！と思い出し、慌てて扉を開けました。

「ね、寝すぎちゃった！！」

「うわっ！？」

扉を開けるとそこには高校時代の軽音部仲間、秋山澪がびっくりしていました。

「あれ？ りっちゃん？」

「うら、うら」

「あっ、居た。おはよう、りっちゃん、澪ちゃん」

「なんだ、ムギもまだ寝てたのか」

「え、えへへへ……高校の時は起こしてもらってたから……」

今日は進学したＮ女子大学初日です。どうやら先程までのは紬の見ていた夢だっ

た様です。
「起きたばっかりで散らかっているからダメーッ！！」
２人が自分の部屋を覗こうとしていたので、慌てて止めましたが本当は寝乱れているであろうベッドの様子を見られるのが恥ずかしかったのです。
「唯も起こしにいこうぜ！」
「ちょっとだけ待っててくれる、寝癖軽くなおしてくるから」
そう言うと紬は一旦自分の部屋に戻りました。家の部屋に比べると格段に狭い部屋ですが、今日からここが自分のお城です。新しい生活に紬の胸はワクワクが止まりませんでした。
「でも、あんな夢みるなんてやっぱり少し寂しいのかしら私。あっ、やっぱりショーツも濡れ子さんね。これも履き替えていかないと。それにしても夢の中で私、自分じゃなくって菫の視線で見ていた気がするわ。私、菫になりたいのかしら？」
呟きながら紬は髪を梳かし準備を整えました。
（夏休みまでは家に戻らないつもりだったけど、ＧＷには一度菫の顔を見に家に帰ろうかしら）
そんな事を考えながら紬は新しい生活への一歩を踏み出しました。

（終り）

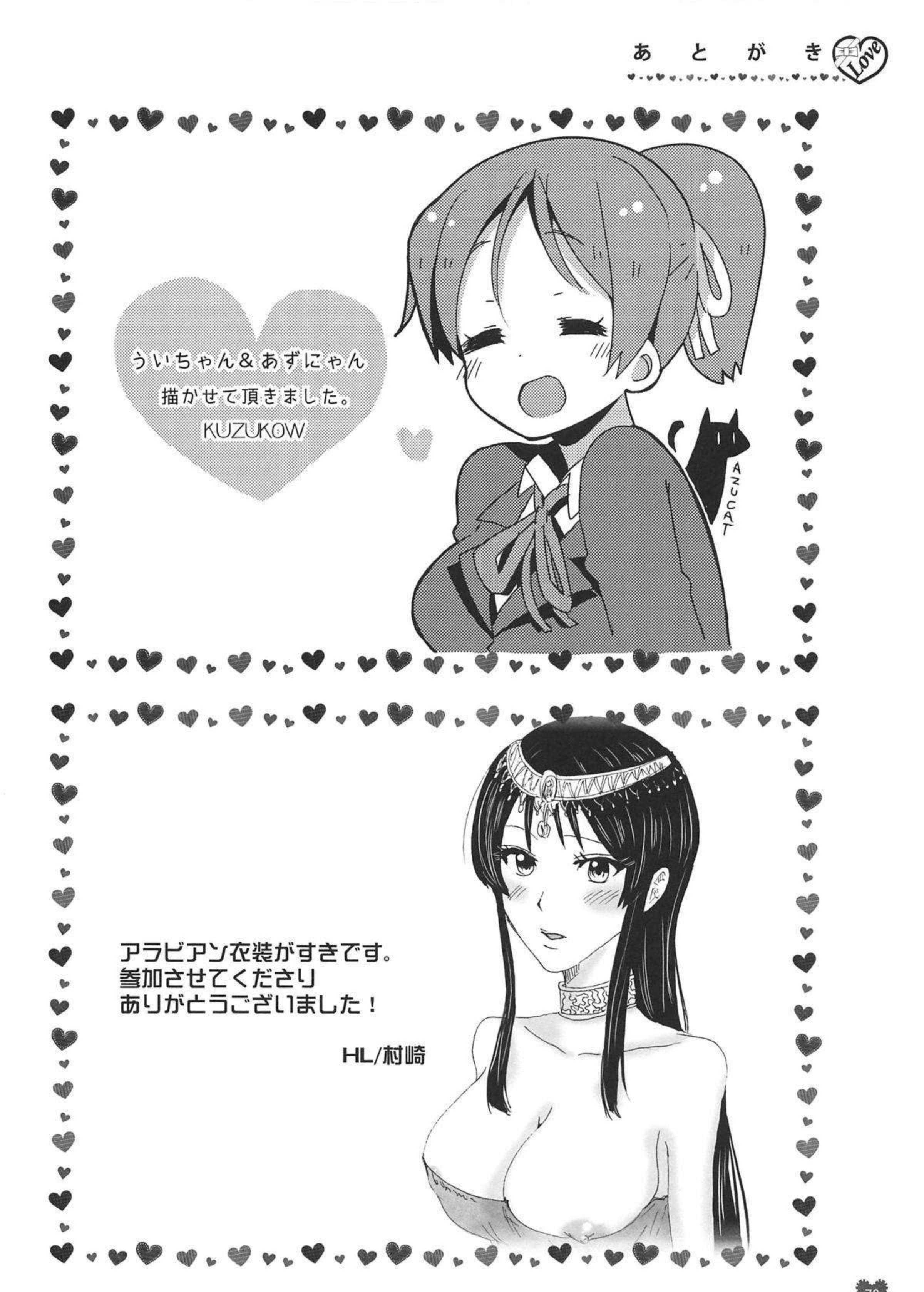
当初はもっとライトSM的なものを予定していたんですが、私の中のムギちゃんに「私、そんな酷い事しません！」と抗議されまして、それに抗えずラブラブエッチなものとなりました。ムギちゃんがいきなり足なめから入るのはその名残りですw

また、文中ムギちゃんの言葉使いなどにやや違和感を感じる部分があるかもしれませんが、これはムギちゃんの中の「お姉さま」願望の無意識の発露です。なぜそんな発露があるのかと言うのは最後まで読んでいただければ分かりますw

それと、これもラストに関連しますが、タイトルの読みは「むちゅうですきして」ではなく「ゆめなかですきして」です。

今回、途中から書き直した事などもあって進行が遅れ、間に合わない！というところまで追い詰められたのですが、イラストの仕上げを屑コウさんに手伝っていただいてなんとか間に合いました。いつもお世話になっておりますが、今回はいつにも増して大感謝です！ありがとうございました！

BEL-TREE


ういちゃん＆あずにゃん
描かせて頂きました。
KUZUKOW
AZUCAT
アラビアン衣装がすきです。
参加させてくださり
ありがとうございました！
HL/村崎

しずぷ

本を手にとってくださりありがとうございます。
久しぶりにけいおん!でR-18を描きました。ソフトエロくらいな気持ちで描きましたが、いかがだったでしょうか？
体のラインを服でごまかせないので要練習ですね！

pixiv　　: 1704677
twitter : @sizupu555

素敵な企画に参加させて頂き、ありがとうございました！

乳首を塗るのが
こんなに楽しいと
思いませんでした♥
まだまだ塗り足りない
ので、
また誘ってください！

濡れ子

5年ぶりにけいぶん!の
エッチなマンガを描きました
P-CRUSHです。

18禁のマンガを描くときは
P論改め、P-CRUSHで
よろしくですわん♥

by P-CRUSH(P論)

どうも、天田じろーです。
今回は肉感にこだわって
描いてみました。

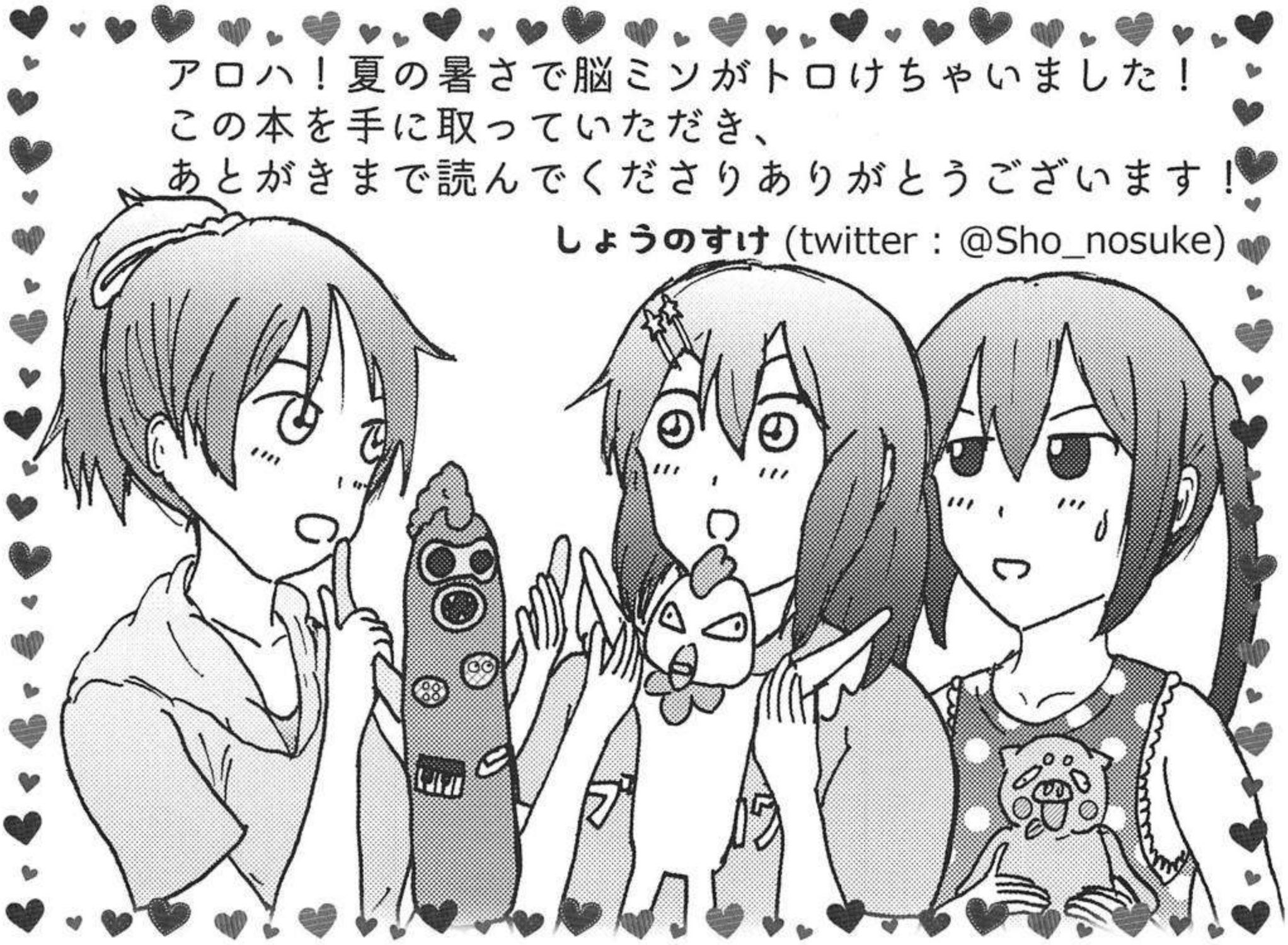
普段あんまり描かないアングルから
描こうと後ろ向きにしたら、胸が見えなく
なってしまったので、あとがき絵でリベンジ
しました(笑)前に描いた物の加工版
ですけど。

次は漫画を描きたいなぁ…と。

天田じろー
twitter @amada26 / pixiv 14367

アロハ！夏の暑さで脳ミソがトロけちゃいました！
この本を手に取っていただき、
あとがきまで読んでくださりありがとうございます！

しょうのすけ (twitter : @Sho_nosuke)



放課後に好きして

発行日：2016 年 8 月 12 日
発行元：んもぅ布団！
発行・編集：BEL-TREE
連絡先：nmoufuton@gmail.com
WEB：http://www.nmou.in/
Twitter：nmoufuton
印刷：株式会社小山オフセット印刷所

ムギ先輩への憧れ

イラスト：しずぷ

K-ON! Fanbook 2016 Summer

Participants

BEL-TREE
Jiro Amada
Kuzu-Kow
P-CRUSH
Murasaki
Nureko
Shonosuke
Sizupu

Publlshed by んもう布団!